
Emerging Disease

風月莢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Emerging Disease

【NZコード】

N3841C

【作者名】

風月莢

【あらすじ】

根絶されたはずの脅威のウイルスAX-58。それに感染しながら生き残った少年、瞬と千代。別々の施設に隔離されていた二人が出会い、そして何かが変わっていく。：

1 · Prologue

彼があのウイルスに感染したのはいつだつただろうか。感染者が祈る間もなく死んでいつた中、感染しつつも「生きている」そう判断されたのはいつだつただろう。そんな彼が他者への感染を危惧して人里離れた施設へ隔離されたのは…？それはもはや少年には思い出せない幼い頃。

公に「根絶された」と言われるAX-58ウイルス。今も少年の体内でひつそりと生き続けているそのウイルスは、感染者を生かした前例が無い。過去に爆発的に流行し、文字どおり巨大な爆発宣しく約六万人を殺した。それはわずか二週間の出来事。今、その話題を掘り起こす人間はいない。

AX-58ウイルスは確かに脅威だった。感染から発症まで一時間弱。そこから死までたつたの一時間。

六万人のうちの何割かはウイルスで死んだ訳じゃない。

「必ず死が訪れる」「だつたら次の感染者を出さないうちに」

何人が人の手で殺されたかは分からない。その中にはあの少年のように生き続ける未来を持った者がいたかもしない。

しかし実際に生かされる運命を持つたのは彼だけで、それも「ウイルスの捕獲」という名目だつた。自然発生のウイルスか。人工的な生物兵器か。

彼も死ぬという前提だつた。それが生き残つて…。

予定外。絶対的な死の前で公表出来るはずも無い。

確かに彼の体内にウイルスが存在している。
だが抗体らしい物が発見される事も無い。

ウイルスと共に生きている。

症状の出ない彼から感染する確率は？

これが「潜伏期間」で、ある日突然発祥する可能性は？

生存者の存在が社会に及ぼす影響は？

少年はあれから十年経つた今でも施設の外へ出る事は無い。テレビ、インターネット、情報社会で世情を仕入れるのは簡単だが関係ない。どうせ出られない。

人間って残酷だ。

色素の薄い少年の瞳に、施設の管理者の姿が映る。

「せんせえ俺を殺す気はないの」

先生と呼ばれたガラスの向こうの白衣の男は彼をちらりと一瞥しただけだった。

要らないなら殺せよ。

目を細めて胸中に吐き捨てたのは、そんな台詞。

「せんせえだつたら俺を逃がすつてのはじめ」

何千と繰り返した言葉。別に返事を期待しちゃいない。

彼は今もそつやつて毎日を繰り返している。

「せんせえ俺を殺す気はないの」

。

「せんせえだつたら俺を逃がすつてのはじめ」

。

決まりきった独り言。

「出たいか」

少年の予想を大幅に裏切つて、白衣の男が答えた。

一瞬少年は目を見開いたがすぐに表情を戻して口元に笑みを浮かべる。噛み付く様な笑みを。

「そりやあね」

「十年か……長い事閉じ込めてるよな。正直閉じ込めてる側の俺も疲れたよ」

腹の底を重い物が這う。このパターンなら無い方がマシだ。

「そろそろ殺すか逃がすか決めねえ？」

「そうだな。殺すのは寝覚めが悪いから逃がすか」

「その気もねえのに言つた胸クソ悪イ」

無い方がマシな不毛な会話。

いやそもそも会話を求める事が間違いだ。

「出たといつて言つなら出してやつてもいい」

白衣の男の言葉に少年の笑みは深くなる。

「他に感染しない保証でも見つかつたかよ」

まるで自分が全ての傍観者だと言つよつた。

「いいや」

この世の全てを嘲るように。

「だつたら、クスリが出来たか」

「いいや」

ふざけんな。

「それで俺を外へ出すなんて無理な話だわ」

逃げられない理由を自ら告げる。

俺がそれを言えば満足なんだる。狂つてゐぜあんた。こんな仕事してりやあ捌け口が欲しいのも分かるけどよ。

「お前が六万人の命の重みを知つていて良かつたよ。逃がしてまたあの惨事が繰り返されると思うとぞつとしたが」

六万だろうが何万だろうが他人の命に興味なんかねえ。

少年は笑う。

「あんたは何にも分かつちやいない」

俺がここに居る理由。まさか本当に出られないとしても思つてんのか。

三食飯付き。労働を強いられる事は無い。生きるのに不便は無い。だからこそ「生きている」「気がしない」「気を抜けば腐つていく確信があるこの檻。

いい加減逃げるか。

煙草を燻らせながら片隅に落ちたそれが「現実」への唯一の感情。煙草も酒も簡単に与えられる。いくらでも。この場所から出る以外は大抵が叶う。それが少年には『そのまま壊れてしまえ』。そんな意図を含んでいるように深く刺さる。

六万が何だよ。俺は何なんだよ。

誰かに敵意がある訳じゃない。恨みも憎しみも無い。自分の置かれた状況を不条理だと思つても、その意味や理由まで否定する気はない。

分かつてる。俺一人閉じ込めときや丸く收まる。分かつてるよ。他人の命に興味はない。誰が死んでも構わない。哀しくない。だけど。

俺が、殺すのは。

「」から出るのは簡単なんだ。
出口なんて見つけなきゃ良かった。

魔が差して出たとして、

何の意味があるのだろうか。

殺人犯になりたい訳じゃない。

自由になりてえよ。

生きている、実感が欲しい。それが無理だつていつなら。
もう、いいから。

「殺せよ」

冗談でも挑発でもないありのままの言葉。

狂う前に消してくれ。もうそんなに待てないんだ。

六万のリスク。道連れに派手に死ぬのもいいかもな。

そんな事さえ考えてんだよ俺は。危ねえつて思う。自分でも。それでもそれが現実になりそうで恐いんだよ。早く。

「殺せ」

俺が理性を繋いでいるつひこの世から消してくれ。

「言つただる。殺すのは寝覚めが悪い」

ああ、いい加減にしてくれ。

「そういう事は考えるな」

溜め息混じりの、白衣の男の声がどうしようもなく耳障りだ。

「…殺すのが嫌なら楽に死ねる薬でもくれ。呑んでやるよ、今ここ
で」

そう吐き捨てる。

全てが面倒くさい。

白衣の男の口元が静かに緩んだ。

「 そうかよ。 」

自殺を望んでたのかよ。

「 あなたも馬鹿だな。 もつと早くそつだと分かつてればこんなに縛られずに済んだものを。 」

「 あんたは俺に、 俺はこの世に。 」

「 相変わらずの墮落主義だな。 瞬 」

明らかに弧を描いた唇が、 笑みをそのままに俺の名前を呼んだ。 カウンターをくらう、 といふのか余りの驚きで自分の体が固まるのが分かる。「 凝視する 」 つてのは何ういう事か。

「 何で呼んだ？ 」

今確かにシユンと。

俺のいつに無い無防備な反応に満足したのか男は遂に声を出して笑い出した。

「 何だ？ これから死ぬって奴に向かってウゼH。 」

残っていたともいないとも言えないような生に対する未練がきれいさっぱり消えていく。 むしろさっさと死にえ。 滑稽な話だ。

「 瞬 」

呼ぶなクソヤロウ。

「 死ぬな 」

「 は？ 」

男の一言が、 知らない国言葉に聞こえた。

「 実は感染者の生き残りがもう一人いるんだ」

続けて紡がれる理解しがたい台詞。

「 …… なに言つてんだてめー 」

「お前と同じ年だ。会う気はないか」

「生き残りは俺一人だつてずっと言い続けてたじゃねーか」

「一体何考えてんだ。それも今更。

「向こうが優等生でお前が問題児だから上の連中が『ねてたんだよ。接触させるべきじゃないってな』

「だからなんで今更」

「今更、じゃないんだ。これでも今まで接触出来るように手を回してきてたんだぜ」

俺に向かつてにやりと笑い、男は「俺だつて情くらじ湧くんだよ」と放つてくる。

意味がわからんねー。

「つか…。その生き残りの奴が優等生で問題ねーなら俺も接触なんかしない方がいいと思うんだけど。あなたの上司懸命だな」

素直に認めてやる。実際そうだ。揃つて脱出なんかしたら大事だ。隔離しといた方が良い。

「あのなー。好意を素直に受け取れよ。同じ境遇の奴と話せるんだぞ?」

「この男こんな奴だつたのか…。今の今までまともに話した事なかつたけど。愕然とする。

「それよりてめーが冷静になれ。すげー危ねえ」

思い出した煙草の存在を主張しながら煙を混ぜて吐き出す。わざわざ言わなくても良い事だが、実際俺の本心でもあるから仕方ない。それを受けてふうつと男は一息ついた。

「冷静すぎるんだよ。お前は。客観視ばっかしてるからこいつ死んじまつた方が楽とか思つんだよ」

「はあ?」

「第三者の意見なんか聞き飽きたつってんだよ。瞬がどう思つてんのか聞いてるんだ」

「俺が?俺がか。

「……せんせえさあ…。真正面から受けたたら耐えられない事とか、

ないわけ？客観的に見てやつと納得出来る事とか。渦中で身を裂く思いするくらいなら総体的な理論に委ねた方がまだマシとか」

男が眉間に皺を寄せる。何で俺はこいつにこんな話してんだ。

「今まで客観視して自分を繋いできた俺としては、自分の感情は殺すもんって持論があんだよ。あんま甘く見んな」

「お前がそれだから接触させたいと思つたんだよ」

「…黙目だもう喋んな無駄だ。噛み合ねー」

「そつは言つても千代は『会いたい』つて言つたから連れてきているんだ」「

千代？

「あ？ふざけんなっ…」

言葉に詰まる。ガラスの向こうに、宇宙服の様な「感染防護服」に身を包んだ少年。外界から自身を守るためではなく外界の自分以外を守るための防護。

「…そいつが…？」

男が紹介をする前に、その少年は世の中に何の不満もないと言つような穏やかさでふわりと笑つた。

「初めてして、瞬」

こいつが、感染者。もう一人の。優等生だつて言つ…。俺と同じ年？幼い顔…。

「てゆーか重つ」

俺の觀察を完璧に無視して「千代」と呼ばれた少年はずかずかとガラスのこちら側に入つてくる。

誰が入つていいつつたよ。

ずかずかと入つてどかどかと防護服を脱ぎ捨てる。音からして相当重量がある事が分かる。

「大きさなんだよね。空気感染はしないつて言つてるのにマジで重いこれ」

やれやれと自由になつた体を軽そうに動かして俺を見る。防護服

の下はTシャツにジーパン。それからいやに明るい茶髪。

「俺、千代。なんか作者の因縁感じるのは。千代って『永遠』って

意味なんだって。で君が瞬でしょ。

『一瞬』の瞬。浅はか極まりないよね~

はははと笑つて自己完結的に喋る。生憎答えてやる義理はない。そもそも言つてる意味がわからねー。

本当にこいつ俺と同じ境遇で生きてきたのか?

「問題児だつて聞いてたんだけど」「俺の想像と違つ、瞬」ああその言葉そつくり返してえ。

「俺今まで話し相手いなくてつまんなかったんだよねー。周りオッサンばっかだしさ。だから会いに来たんだ」

そう言つてへりつと笑つ。

…なんか。「わざいんだけど。

「そんなあからさまに迷惑そうな顔されるとたあ、…………

そつか顔に出てたか丁度いい。早く出でけ。

「いつそ面白くよね

ははは。

うつと待て仮にお前が面白いと感じるとしても俺は違う。ま
ず同意を求めんな。

「ねー瞬

「うつせえ馴れ馴れしく呼ぶんじゃねえ。俺は会いたくなーつ
つたんだよ」

不毛だろ。

「ええ?孤独を愛する派?渋…」

「ちげーよー

「じゃ何。感染者同士積もる話だつてあると思つたの」「元
なんでこんな軽いんだ。くそ、苛々する。

「話なんかねえ

「あるつて。少なくとも俺には

「近寄んな俺は馴れ合いなんか求めてねー」

初めて沈黙が訪れる。

傷付けたか。 けどそれが必要だ。 悪いな。

「そのままそやつて孤独を守つて死んでくつもりなのが驚いた事に真面目な聲音で聞かれた。 なんだこんな声も出せるのか。 真剣に馬鹿かと思つてた。

「要らねー罪は背負いたくねえ。 一人なら諦めるのも簡単だ」

一人なら未練なんか持たずにいられる。 面倒くさい事はしたくねえ。

「ふうん」

呆氣無い返事だった。 分かつたのか分かつてないのか。

「でもさあ」

分かつてないな……。 うんざりする。 でも、 つて何だ。

「俺暫くここで生活する予定なんだけど」

……

「はあ！？」

「だつて感染者の輸送なんてそう簡単に出来るもんじやないしぃ。 ここに来るのだつて手続きとかなんかで半年はかかったんだよ」

「 つこつこて……ここか？」

「 そつそつ」

〔冗談じやない。〕

「何とかなんねーのかよ？」

「無理。 瞬が拒否るとか誰も思つてねーもん」

何だそれ……。

追い出す訳にもいかねー。 俺が留まつてもこいつが外に出たんじや意味がない。 大げさだと言いながら防護服を纏うくらいだからウイルスを巻き散らかす気は全然ないらしいが。

一つ舌打ちをする。 その舌打ちが“了承”を物語る。

じうして頼んでもない共同生活が始まった。

喧嘩を売つてゐるのかそれとも行き過ぎた冗談か。

「どっちなんだ…」

突然の訪問者、千代の滞在を認めてから一夜が明け……クソ、朝っぱらから頭が痛い。

「何?」

見下ろした床にはくつろいで胡座をかく、問題の少年。とても昨日来たばかりとは思えない適応の早さであつたり熟睡、予想に反せず健康的に早い起床。俺の浅い睡眠を顧みず恐らく日課らしいストレッチ。こっちもそれ以上寝る気分にもなれず起きたは良いが、とにかく煩い。トークが、ではなく存在が。

むしろこいつの方が前からここに居たんじゃないかと錯覚さえ覚える。それはいつそ「千代がここに馴染んでいる」のではなく「この空間が千代に馴染まされている」といった方がまだ分かりやすい程だ。最たる原因はこの朝から途切れる事なく運び込まれてくる本。ああ、あの段ボールの中身も本だ。どんだけあんだよ。遠慮つてもんはないのか。今もくつろいだ様子のその手には分厚い本が一冊。丁度真ん中のページ辺りで開かれている。

「瞬、何が?」

きょとんと見上げられた田には微塵の悪意もない。自覚なしか。

サイコーだ。

「何が、じゃなくてこの荷物は一体なんだ」

「本だけど」

「すげーよお前。大物だ。

「んなの見りやわかんだよ。何で持つてきてんだ」

「んー…。なんとなく」

「なんとなくでこの量か?」

「ここでやつと「ああ」という顔をする。今更なんだよ勘弁してくれ

れ。

「邪魔?」

「言つまでもないだろ」

「ここ広いし殺風景だから別に良いかと思つたんだよね。瞬持ち物無さ過ぎぞ」

「話逸らすな」

「『めん』

「ごめんとか。言つ奴いるんだな。

「床に置くな。棚も一緒に持つてこいバカが」
千代の目が丸くなる。あれ?と言いたげな。でも次の瞬間に笑っていた。あの最初に見せた世間で言つ「無邪氣」だとか「悩みなんてありません」みたいな軽やかな笑顔。

「瞬で良かつたなー」

…しかし生憎俺はそうは思わない。

「恐ろしい事言うな

その後暫く千代は「良かつた」を連呼していた。それを見ながら

「下らない」と思った。

ただ「下らない」と口に出せずにいる自分が可笑しかった。

千代はマイペースな奴だ。よく喋るがそれは別に相手に気を使つてゐる訳ではないらしい。自分が思つたまま喋る。沈黙が恐いとか、そういうありがちな感覚はない様だ。唯一の救いだと思う。俺には静寂を埋める話題づくりなんて術がない。

「趣味とかないの?」

大人しく本に齧じり付いてんな…とか思つていたら千代の口から突然そんな言葉が漏れた。俺がぼんやり煙草吸つてんのが気になつ

たのだわつ。これで何もしてないよう見えて頭ん中はそれなりに動かしているのだが、もちろんそう言つ氣ははなはだない。

「ああ？」

「ぶつきらぼうに返す。

「一人で今までどうやって時間潰してきたのかなあって」

「…さあな

「…」
どこか自嘲的な言い方だと黙つてから氣付く。趣味か。その言葉の意味がまずわからない。いつ死んでも良いようにつけて考えてたんだぜ。今も。そんな奴に趣味が必要か。

「煙草美味しい？」

脈絡ねーな。俺の返答がこれだから仕方ないんだろうナビ。

「美味くはねーよ」

「へえ」

それで会話はぴたりと終わる。

千代が来てから最初の一週間はそんな調子で過ぎた。

生産性のない会話。

ギリギリ遠く取る見えない距離。

踏み込む気はないし、踏み込ませる気もない。

近寄るな。近寄らせぬな。それで守られるんだから。

一週間が過ぎ、一週間が過ぎ。

頼むからその場所に立つのは止めて欲しい。

嵌め込みの巨大な窓ガラス。

俺たちは決して行けないのだから。
その隔たりの向こうへ。

「千代」

初めて名前を呼んだのは、出会ってから一月が経った頃だった。月の白く冴えた逆光を受けてガラスの前に立つ背中を呼んだ。ひやりとした春の夜。ひやりと、とは言つても実際には施設の中は常に適温が保たれているらしいから、それは俺の気のせいだ。俺はこの世界の温度なんか覚えてない。

少しだけ驚いた顔をして千代は静かに俺を振り返った。俺を視界に入れて微笑む。

「眼中にないかと思つてた。俺の事」

そう言つた。相変わらず微笑していた。俺は答えない。

「月がさ、キレイだと思って」

闇に溶けるような口調だった。そのまま溶けていきそうな気がした。

霞んで無くなつてしまいそうな細い月。深い墨を零した闇。それでいい。

太陽も青空も望まない。

ゾクツと狂氣が動くのが分かる。

誰か何か言つてくれ。さもなきや今すぐ殺してくれ。

千代は言葉を紡がない。ガラスの向こうに戻した瞳を、届かぬ空に預けるだけ。その無言の内にある感情を俺は知っている。あの下にある風も匂いも、俺たちは感じる事がない。焦がれて焦がれて、

行きたくてそれでも、叶わない。

出口の存在が過る。

千代が来た時からこれが恐かつた。

俺一人なら平氣だつたのに。

それなのに。

同じだなんて思つたら駄目だ。
どれだけそれに憧れてるなんて。
どれだけそこに行きたいかなんて。
知つてしまつては駄目だ。

生きるつて、もつと。なんて。

「そこに立つな」

抑えた声で、出来るだけ何でもなく聞いじえのよひに言つた。千代、
そこに立つな。そこでやつやつて、眩しそうに外を見るな。

「なんで」

「なんで、じゃなくて。

「…いいから」

そう俺が濁したのが気に入らなかつたらしい。

「なんで」

強い調子で再び聞かれる。

「なんでだつていいだろ」

「良くない。言わなきや分かんない」

「言う必要なんかねえ」

「なんで…」

最後の「なんで」は語尾が掠れるよひに消えた。伏せた瞳が悔し

そうに揺らいだのが分かつた。

「いいからだけよ

「瞬は」

千代が口を開く。聞かない方が良いことつてこ思ひ。

「千代、黙れ」

「瞬は」のまま一生

「黙れ」

「！」で…」

我に返つたのは殴つた後だった。

「 悪イ…」

俺がそう言つと、千代は左の頬から脣にかけて手の甲でぐいっと拭つた。

「別に。もう、いいよ。分かった」

諦めたように呟いた。普段の軽い口調でも、かといって真剣な口調でもなく、中身を窺い知る事の出来ない冷めた言い方だった。

「俺はさ、喧嘩したくて来たんじやないし」

言葉が見つからない。

「ここに立つの、なんで嫌がんのか知らないけどもつ聞かないし」

そうやって、お前は妥協するからあんなふうに笑えるのか。

「でも俺別に瞬に嫌がらせした訳じゃなくってただ」

月が見たくて。

分かつてんだよ。そんな事は。

「分かつてる。悪かった」

言った瞬間に月の光しか存在しない部屋が一層しんど静まった気がした。

千代の驚いた気配がじわりと伝わってくる。

「分かつてんだよ。俺だって知ってる」

「知つてるつて…」

「外に焦がれる気持ちも。生きてる証拠が欲しいのも

半端に口を開きかけて、千代は何も言わずにこちらを見ている。

「そこに立たれると余計現実突き付けられてる気がすんだよ俺は。

行けないから……、悲壮感増すだろ
だから嫌だ。

「なんで……。言わなくても、もつ俺聞かないって
いや。なんかそれはそれで」
口^くもる。自分で矛盾した感情が渦巻く。

「それはそれで？」

「……お前まで諦めてんのが。つーか、……諦めると見んのってあ
んま気持ち良いもんじゃねーなあ……」

俺は今まで二つやつて諦めてたのか?世の中を、生きるのを?

すうっと肩の力が抜けていく。

「瞬?」

「オモシロオカシク生きんのも良いかもな。今まで我慢してたし」

「瞬、大丈夫?」

「問題ねー。千代暴れるぞ。付き合えよ」

自然と口角が上がった。それは多分、千代のふわりとした笑みか
らは遠く、もつと殺伐とした…。

試してやる。自分と、世界を。

4・シナリオ

「瞬。それ体に悪くない？」

横顔にくわえ煙草。

「一応未成年だつてのに」

呑気な感想に苦笑が漏れた。

「そんな事より千代、これ見てみるよ」
煙草を揉み消しながら、抱えていたノートパソコンを千代の方に向けてやる。

「驚きだぜ。ここ、東京だつてさ」

パソコンに目を落としたまま無言の千代。言葉を発する気配もない。煙草に意見する気はあるのにここにはコメント無しか。まあ妥当な反応だけど。

「…」

千代は口を開きかけては黙る。その繰り返し。それが結構面白くて、俺は何も言わずに待っていた。

「なんで」

やつと出てきた台詞が。なんで。

「なんだよ。気の聞かないコメントだな。もつとマシなの期待した」
辛辣な言葉にも千代が驚いたままの表情で固まっているのはパソコンに映る内容か、それとも俺が（恐らくタチの悪いという表現が適切な）笑みを停めているせいか。

「だつて、瞬、施設の外に興味なさそつだつたし、実際俺ら出れる訳じやないし。ここが何処とか。それこそどうでもいいっていうか、知つたからどうつて事も…」

「どうしたことあるんだよ」

自分はやつぱり性格が悪い、と思つ。千代のネガティブな発言が面白い。

「千代。俺は」

ばしつと視線が合ひ。ああ、きつちり聞いとけ。

「諦めるのを止めたんだよ」

そうだ。いつ死んでも同じとか。仕方ない、なんて言葉で濁すのは。

「止めた」

「瞬……外に……、出るつもり……？」

恐る恐るといった質問。「もしかしたら」とふとよぎる。外に被害が出る事を恐れているのは俺より千代の方なのかもしれない。でもそれも知らねえ。俺はニヤリと笑う。

「ああ」

「そつ……か」

空気が張るような数秒。止める言葉を探してゐるのか。
無駄だぜ。

「瞬、だつたら……」

「おう」

「俺も付き合ひよ」

予想外。

「止めないのか？ 優等生」

「うん。必要ないからね」

ふわり。その笑みは全てを受け入れるようで、全てを拒絶するようで。ただキラキラとした瞳だけが千代に偽りがない事を物語る。

「瞬。俺は面白いのがスキ」

調子狂うよお前。

「優等生より、共犯者の方が魅力的だ」

素行良好そうな顔して。

「後に引けないぜ？」

「そこが面白いんだよ」

なんだそれ。

「そもそも空気感染しないし、多分他の感染の仕方もない」

?

「…それって、」

「だから、実際の話俺たちが外に出たといふと何も起らないと思

うよ」

「は…」

それは。

「あーだから…。俺たちが隔離される理由つて、つまり、…、無い
んだよね」

「あー!？」

「…待て、

「感染するかもしれないから閉じ込められてるんじゃないのかよ
だから十年も大人しくしてたんだぜ俺は。

「…。千代、お前なんか知ってるのか…？」

「まあ…十年もあつたんだよ、研究の成果が全く出ないなんて変だ
ろ」

どんなウイルスなのか。感染ルートはなんなのか。

「俺だつて調べた。他にやることもなかつたし、考えるのはそれな
りに面白かつたし」

「聞きたいのはそんなことじゃない。

「俺、研究室に入りしてたんだ」

ウイルスの提供者として。それから、

「もちろん防護服来てだつたんだけど」

研究員として。

「ある日突然一緒にやつてた研究員の一人が感染して死んだつて聞
かされた」

「感染…？どういうことだよ、矛盾してるだろ」

千代が顔を伏せる。軽そうな茶色の髪が重力に従つて落ちた。弧を描いた唇は恐らくいつもの笑みとは違う。髪に隠れた目が見ればその意味が分かりそうだつたが、無理にそれを暴く気にはなれない。

「瞬つていい奴だよね」

「場違いな台詞。遠回し過ぎる。」

「…はつきり言えよ」

「俺、信じれなくて。死んだつて」

「研究を打ち切る言い訳にしか聞こえなかつたんだ」

「…頼むから分かりやすく言つてくれ。全然呑み込めねえ」

「迷宮入りさせる、口実だよ」

「口実…？」

「もう調べないってことか？」

「じゃなくて、

結果が、」

「…なんだよ」

「都合の悪い結果が出たんだ。きっと大多数にとつて

「…」

「例えばウイルスの発祥地が国に必要不可欠などころだとか、今まではテロだと自然発生だと誤魔化されてたけど、とにかく研究結果が表沙汰になつたら不利益が多いことなんだろうと思う

…揉み消されたんだよ。俺たちの、存在こと。呴かれた言葉に逃げ場所がない。

「研究員の一人が死んだつて以外俺は何も聞いてない。俺は研究員全員を知つてたのに、犠牲者が誰か教えないなんておかしいだろ。どうして感染したかも、ほんとならそこからルートだつて割り出しあやすくなつただろうに『だから研究は打ち切る』なんて、不自然すぎるよ」

「それは、お前の推測だろ……？それとも確信してるのでか？」

確信してゐる。そう言って上がつた千代の田は、揺らぐ素振りもなく涼しげだった。

「研究員は全員生きてる」

「……で、研究は事実上打ち切り、俺らはここで朽ち果てるつてのが用意されたシナリオか？」

「そういうこと」

「何だつて言うんだ……」

「それは証明できるのか」

何も言わない千代の目に先を促される。

「他に感染しないこと、研究員が生きてること」

お前の言つてることが真実だつてこと。だとしたらお前は、一緒にやつてきた研究員や、結果や、その先の未来にどれだけ裏切られたつて言つんだ。

「俺の口先が信じられないなら外に出る以外証明するのはムリ」

冷えていく。そう思つた。

俺と千代の間を埋める空間が、遠い。

「俺が外に出るつて言わなかつたらお前、……」

「このまますつとここにいるつもりだったのか？」

「あー結構どつちでも良かつたし俺。無理矢理出るほど外に魅力も感じてないしわ」

多分本心なんだろ?」

「千代。俺はお前と一緒に外に出る」
真剣に言つたら千代が吹き出した。

「何の宣言だよ、そんなキャラじゃないクセに、」
あははマジウケる。

「……本気で笑つてやがる……」

「やつぱてめー「うせーべ…」

「じめんじめん、ついていきます隊長ーー。」

ははは。

ダメだわかなーーに。むかつく…

「ねーねー瞬

「だよ、」

溜め息、苛立。 有り得ねえ。

「サンキュー」

…。

なんか。

…まあ、いいか。

なぜか苛立つるのが馬鹿馬鹿しくなった。

「なあシナリオ書き換えつて、アリだよな」

独り言と問いかけの間の中途半端な咳きを空気に乗せる。千代の描いたシナリオか、ただ押し付けられただけのシナリオか。どのみち従えない。

コメントを寄せす代わりに千代は口角を柔らかく上げた。ああ、そつちの方が似合つてる。

「派手にやろいぜ。感染しないなら躊躇わずに済む」

「うん。でも当たつて碎けたくはないね」

そう言つて喉の奥で笑つ。

「言つてることの割に楽しそうだな」

「え、あー、わかる?…うん、楽しいんだ俺」

いや言わなくてもわかるけど。見れば。

「得なキャラだなお前」

「ん？うーん、ありがと」

今礼言つ意味と言われる意味あつたか？

「褒めて、ない」はず。

にこやかに頷いた千代は、それでも相変わらず俺に出来ない笑い方で、

「気にはんなつて」

へりつと言つた。じつこのまゝ、わかり合える日が来ない気がする。

からからと流してこくとは俺には出来ない。真似するつもりも無い。

けどここつと一緒にいくのはそんなに悪くないと思つ。手に手を取つてなんて、それこそ柄じゃねーけど。

「あー俺本氣で瞬で良かつたと思つよ、逃げるだけなのにワクワクする！」

…脳天氣。とにかく取り敢えず、…真似はしたくない。

「無駄にポジティブとか今要らねーから」

「うわ冷たー」

「ヽヽヽ」

「…すいません隊長」

「隊長じやねえ！」

「当たつて砕けないためにほじつすれば、「千代真面目」に聞け

「…、わかった…」

これじゃあ先が思こやられる。

頭痛の予感を紛らわすように放置していたパソコンを引き寄せた。

5・おかれり

「取り敢えず、施設の設計図と警備の人数、配置だな。まあ設計図はホストコンピュータに侵入すれば見つかるだろ」

キーを叩きながらぼやくと、右隣からパソコンを覗き込んでいた千代が目線を俺に移した。

「侵入、つて」

「ああ、これ犯罪だっけ。

「ハッキングってこと。任せろバレねーから」

そもそもオンラインで繋がるパソコンを日々と俺に渡した奴らが悪い。

「そんなこと出来るんだ瞬…」

感嘆と、半分呆れの混じったそれでもいくらか控えめな感想が耳に届く。

「お前はさあ、前の施設じや周りと良心的な付き合いしてたみたいだけど」

視界はスクリーンのまま、声だけを千代に向ける。

「俺はそういうやり方に興味ねーし」

正当な方法は正当な権利を認められた人間が行使すればいい。

「ついか言い忘れてたけど、俺この部屋の鍵開けるから」

千代がつきかけた呼吸ごと停止した。

「…え、」

「だから鍵開ける。… オイそろそろ息継ぎしろよ」

大丈夫かよ。

「嘘だろ」

「嘘ついてどうすんだよ」

「だつて…、この部屋の鍵は外からしか開かないって千代が動搖するほど俺の思考はクリアになる。

「設計者のコンセプトは一応そうだろーよ」

今までどうやって時間を潰してきたのかと。これが答えた。

「けど俺にどうてはちゃちなパズルだ」

暇つぶしになりそうな事ならほとんどやった。おかげで犯罪以外では役に立ちそうもないスキルばかり身についた。

「脱出するためにお前に足りないものは、全部俺が持ってる。技術的には問題ねえ」

そして多分俺に足りないものを、こいつが。

「なんか…、割に合わなくない? 瞬に犯罪みたいなことやらせんの、ちょっと気分悪いんだけど」

「犯罪みたいじゃねえ、犯罪だ」

「きつぱり言うな」

小さく拗ねるような声が聞こえて、その後溜め息が続いた。
「瞬はさ、俺が思つてるよりずっと面白い奴だよね」

「…。はあ?」

何言い出すんだ突然。千代の脳みそは俺とは根本的に質が違うらしい。薄々そんな気はしていたが、それがついに確信に変わる。俺にしてみれば前の会話が丸ごとすっ飛ばされたような気分だ。
「…今のどこをどう解釈したらそんな結論になるんだ…」

「ん、素直な解釈だと思う」

そう言って、機嫌が良いのか(それとも特に何も考えていないのか)千代は毎度ながら微笑していた。

「どいがだ」

逆に俺はもやもやしたものが残って、眉間に皺を寄せる。

「瞬あんま難し 頭すんなつて。硬い硬い」

はいりラックスー、とか何とか言つて背中を叩かれる。そのせいで俺は余計に苛ついたのだが、もちろん千代がそれを悟る気配はない。

「テメーはもう少し難しい顔してろ笑つてんじゃねえ緩すぎだ」

後ろ手に振払いながら文句を投げる。緩すぎの千代の顔は曇りもせず楽しそうで、こつちは苛ついただけ損をしたのだと気付くが、

だからと言つてどうしようもない。

「うんじゃあ俺が警備の人数と配置調べればいいよね」

「ここには一人しかいないのに、話の道筋が見えているのは千代だけだ。俺はうんざりするが咎めるほどでもなくて、それはそれとして諦める。

「随分あつさり言つたな。調べれんのかよ」

「うーん多分ね」

「…へえ。

へらへら笑つてた瞳にどこか別の意志が混じつただけで千代の表情は180度変わった。

「だつたら任せる」

「はは、期待しててよ」

「おう、設計図は手に入つたからよ」

Hンターキーを強めに弾く音が思いの他響いて、千代が誘われるよつに身を屈めてきた。スクリーンに施設の詳細な設計図が映し出される。

「速…うわ。スゴ」

ボキヤブラーイーを駆使した言葉じゃないから心地が良くて、知らず氣が緩んだ。

「あつ、そうそうそれそれ！」

「つうるせえ！！なんだよ！」

いきなり至近距離ではしゃがれて、咄嗟に怒鳴りつけた自分の声が予期した以上にでかくて一重に驚いた。こんなふうに思つたままを他意無く発するのには、ずっと抵抗があつたのに。

「そーゆー顔してればいいんだよ」

ひどく晴れやかに言われて呆気に取られる。

「…なにが…」

「うんやつぱり人間、眉間に皺寄せてるより多少無防備な顔しててる方がいいねって話」

「へえ…、」

「なんだよノリ悪いなあ

「んなことで一々はしゃぐな面度クセH…」

それは本当に俺に取つてどうでもいいことで、そこに価値を見出しているむらじい千代には悪いが実際本気でよく分からない。ノリのいい俺つてのもなんか気持ちワリーし。

「まあイイや

まあイイのかよ。

「じゃちゅうと行つてくるね

「は？」

「警備員のシフト表とか色々、パクつてくれる

「はー?」

「早い方がいいでしょ」

立ち上がりかけた千代の腕を掴んで引き止める。

「ちょ、待てって、」

「うん? 他にもなんかいる?」

「何しこどに行くんだよ」

ぽかんと俺を見下ろす千代は少し素っ気ない。

「必要な情報を集めに、警備員室に行くつもりだけど。…なんで止めるの?」

「危ねえ、だろ。…」

脱出の算段を整えてるなんてバレたらどうなると思つてんだよ。ちよつとは慎重になれねーのか。

頭上の空気が揺れた。千代がふつと笑う。

「俺を信用しなよ、瞬

試すよつに囁かれる。今手を離さなかつたら、きっと千代のプロ

イドを潰すだろ。ひ

「分かつた。気をつけろよ

「うんありがと」

柔らかに紡がれた柔らかな言葉が千代にはとても似合つていて、そんなこと言つても言わるのも慣れてない俺はなんだか焦れった

くて、否定したいような気がした。別にありがとうなんて言わなくても成り立つ会話でも、こいつはそれを言つのを躊躇つたりしない。「鍵、開けるか？」

手を貸そうと最小限を持ちかける。

「ううん。いいよ、それは切り札にしちゃうよ。普通に散歩したいとか言って防護服来てくから大丈夫」

あのすげー重そうなやつか。無意味と知りながら身に着けるのだから「苦労だとしか言い様が無い。

「お土産欲しい？」

「たかが何メートル離れるだけで土産かよ」

防護服を着たところで、動けるのは施設内だけだ。そこから公式に外に出ようとするとなるほどんど狂気に近い書類の山と検査をパスする必要がある。しかもそれだけやって外に居れるのは人のいない山奥に一小時間というのだからやつてられない。

立ち上がりつて不自然に足を止めた千代が振り返る。

「瞬、ここから出たら何したい？」

「……」

別に、そんなの。

「自由って、何だらうって、分からなくなるよ
知るかよ。

「無事に出てから考える。今の優先事項はそれじゃねえ」

「そうだね」

微笑んだ千代は納得したようにも見えたし、何も感じていないようにも見えた。

「分かんねー奴だなお前も」

ぶつきらぼうに言つても千代が反論することはない。

「やりたいことはともかく…。行きたい場所ならあるぜ」

千代の瞳がぱっと開いて、どうやら興味を惹いたらしいことが分かる。何に悩んでんだか全然理解は出来ないが、その時その時の表現は開けっぴろげにストレートで分かりやすい。不思議なもんだ。

「どこ？」

「海」

青い海。それだけ。

人込みに混じってみたいとか、そういうことは思わない。
そう言つたら千代が笑つた。ああだよね、と、気負いのない返事
だった。

千代が装飾の一切無い簡素なブザーを押す。施設の人間を呼びつける機械的な電子音だ。

力チャヤ、と受話器を取つたんだかマイクの電源を入れたんだかのつまらない音が聞こえて、男の声が被さる。

『どうした？』

愛想も何もない煩わしげな第一声だ。これでこいつは「情くらいわくんだよ」とか言つてたんだから全くどうかしている。ついでに白衣の上でにやつと笑つた男の顔まで思い出して、元々高くもないテンションが更に落ちた。

「気分転換したいので鍵を開けて貰えませんか」

内線の男の声に応える千代の台詞に内心ビビつた。丁寧な物言いは、しかし男に引けを取らないくらいに愛想がない。

『ああ、防護服着ろよ』

千代の愛想の無さには頬着なしに内線はあっさり切れた。

この部屋は物々しげに三重扉になつていて、こちらから見て二つ目までは硬貨ガラスだから無駄に長い廊下が見える。

ここが東京のどこだか知らねーけど、住宅事情が大変だつてのに一体どんな権限だよ。

下手をしなくても十分人が住めるだけの余裕がある。
「行つてきます」

俺には愛想の安売りをする千代は、当たり前に笑つてひらりと手を振る。

「おう」「ひ

一人の例外も無く誰にでも分け隔てなく愛想の無い俺は、やつぱり笑顔で送り出してやるなんてサービスもしない。ただ了解したという意思表示をするだけ。

どこで操作してゐるのか、ガチャンと一枚目の扉の鍵が外れた音がして、千代がそれに手をかける。

「あーあ、あの服マジ思いんだよなー…」

そうしてぼやきながら扉は閉じられた。

千代が出て行ってから久々に一人きりの自由を堪能した。いや、実のところ包み隠さずいえば「堪能」では語弊がある。煙草を吹かす程度のその小一時間は、自分でも驚くくらい虚しく感じた。今までこれが普通だつたのに。

隣に居れば居たで実際鬱陶しいが、居ないことに違和感を感じる程度には俺は千代に愛着があるらしい。そう気付いてうつすらと背筋が冷えた。何寂しがつてんだ、キショイ俺…。考えなくて良いこと程考へてしまふもので、感傷を振払えずに呑氣な時間が過ぎる。そうして60分が過ぎる頃、遠くで声が聞こえた気がした。視線をドアに向かつて上げる。

「…何やってんだ、千代」

千代が帰つてきて、それはいいのだが三重扉のこちらから一枚隔てた向こうで俺に向かつて何か叫んでいる。聞こえねーよ。お前に目の前の扉は見えないのか千代。遮られてんだよ。

暫くして千代が部屋に入つてきて、それを俺は半分呆れながら迎え入れる。

「何叫んでたんだ今。そんな一刻を争うことだつたのかよ聞こえねーよ」

「うん?」

最後の扉の前で乱雑に防護服を脱ぎ捨てた千代は、体が軽くなつた開放感からか大きく腕を回して俺を見た。

「ただいまつて、言つてたんだよ」

「あそこから言つ必要ねーだろ…」

前言撤回だ。寂しいとか何かの氣の迷いだやつぱり意味がわからん

ねーこいつ。一人の方が楽だ。

「一生懸命さが伝われば『おかげり』って言つてくれるかなつて思つて。瞬フツーにただいまつて言つたくらいじや返してくれなさそうだから」

だからセニがわかんねーんだよ。一生懸命さつてなんだよ…。

「そもそも俺に言われて嬉しいのかお前は」

「そうだ問題はそこだ。あー苛つぐ。」

「うん嬉しいかも」

さらつと流すな、つーかどつちだよ。かもつて。

「ちょっと凹んだしや、さつき、」

そこで言葉を切つた千代はそのまま黙り込んでしまつた。伏せた睫毛もそのままで、どうやら外で何かがあつたらしい。

「なんだよ」

聞き返した俺をふつと見て、逡巡しながら千代が口を開く。

「施設の人達が、俺見た瞬間あからさまに逃げ出したんだよね」

「感染しないつて知らないんだろ、ここの奴らは」

「防護服着てんのに理不尽じやん」

「こここの奴らは感染者が外に出ることに耐性がねーんだよ。俺は出

なかつたし。防護服着てりやいいつて話じゃねーんだよ」

「そうかもしんないけど、でも、ちょっと傷付く…」

ああ、だから。

「あのさあ、千代…」

「うん?」

「あー、こや、…」

「瞬?」

「こんな溜めて言つ」とでもないんだけどな…。

「なに?」

「…おかえり」

タイミングの悪い挨拶は気まずい。けどその意味が、少し分かつんだよ。

千代が極上の笑顔で笑つて、俺に手を伸ばしたから思わず身を引いた。

「つ、なんで逃げんの」

不満そうな声が上がる。

「抱きつかれるかと思つて」

「抱きつこうとしたんだけど」

「…俺お前のこと理解するために努力するから、お前もちょっとは俺のキャラを理解してくんねえ？」

「…キャラ変えれば？」

あくまでお前は地でいくつもりなんだな。ああ、頭痛がしてきた。

「瞬、ありがとね」

それが似合う、お前には。千代のせいで起きる頭痛は、千代の一言で収まるようだ。

「別に。ただの挨拶だろ」

ただいまど。そう発した人間を受け入れる言葉。帰つてきて良い場所だと、存在を肯定する。

満足そうに息をついた千代は、軽い素振りで俺に紙切れを手渡した。

「はい、『希望の品』

警備員のシフトと、立ち位置。その紙には事細かに詳細が書かれていて、書いた人間の几帳面さが伺えた。

「仇になるな。この生真面目な性格は」

呟いて細かい文字を追つ。

規定の場所に規定の資料を置くような人間だらう。そういうダメな人種は行動を読みやすい。ましてそいつの管理下に置かれた部下たちなら尚更。

「規格外の事態に対処出来ねーよ、こいつは

「好都合じゃない？」

「まあ……、俺たちにとつてはな」

歯切れの悪い俺の言葉に千代が不思議そうな顔を作る。それを察して言いたくもないが黙つて居るのも変だからと俺は言葉を繋ぐ。

「あんまり、誰かのせいにはしたくなーんだよ」

「俺たちが逃げること?」

「ああ、無理だけど」

きょとんとした目が俺を見つめて、意外そうに瞬いた。

「瞬つてそーゆーのを『偽善』とか言つて馬鹿にするタイプかと思つてた」

「基本はそーいうタイプだよ」

「じゃあこれは例外?」

「例外?」

単語をなぞつてつい口元が緩んだ。

「例外、じゃねえ。偽善でもねえ」

ただのエゴだ、こんなのは。誰も傷つけずに我を通そうとしている。犠牲を払わずに欲しいものだけ手に入れようとしている。

「ふうん」

さして興味無さそうに千代が相づちを打つた。

「じゃあ責任が大量の人間に分散されればいいんじゃない? 一人じやなくて。したら一点集中で責められる人いないし。トップだつて自分だけ責めなくていいし」

それで全く問題がない訳じゃない。何かが解決する訳でもない。でも。

他人の人生を丸ごと潰すのは避けられるかもしれない。俺が十年死んでたみたいに、誰かの心を殺す、そんな吐き気がする事は。

「それなら丁度いい日があるんだ。俺たちはきつくなるけど」

ほら、と千代が指差した日の警備のシフトは他と明らかに扱いが違っていた。

これ以上ないくらい、鉄壁のガードと言つて差し支えない警備体制。きつちり一週間後の警備の配置と人数は尋常ではなかつた。

「ね。丁度いいでしょ」

平然と言つてのける千代には、その意味がわかつてゐるのか。

「警備員フルに入つてんな…何があるんだこの日」

一日だけピンポイントで守りの堅い予定表は、どう控えめに見ても違和感を拭えない。

「警備の訓練？」

まさか。

「んなのしねーよ、この十年一回もなかつたんだし今更。大体常勤に上乗せしてまで訓練するメリットがねえ」

「日にち分けてやるの面倒いからみんな一遍に訓練しましょー、とか」

「どんだけお気楽なんだよ」

溜め息を吐き出す一方で、千代のほほんとした思考を少し羨ましいと思つた。

「なあ千代。あの防護服は、俺たち以外を、守つてんだけ」

「うん」

「いつだつて主体になるのは平和ボケしてる奴らだ。俺たちじゃねえ」

つまりそういうことだ。

「この日恐らく部外者が来る。そいつを守る防護策だ」

俺の思考はこっちだ。夢なんか見ない。

「部外者つて、…」

千代の言葉の先が消える。言い淀んだのではなく、言ひ口詞が見つからないせいで。

「間違いくなく『俺たちを見に』来る。施設の設備をじやねえ。俺た

ちを、だ

この警備体制がそれを何よりも物語る。

「見て…どうすんだろ」

「ここに来るってことはそれなりの権限があんだろ。『この二人が感染者ですが煮るなり焼くなりお好きにどうぞ』ってどこかもな」

「それ笑えない」

「笑わせたくて言つてんじゃねーよ」

突つ撥ねると、千代は顔を伏せて頷きながらひらりと手を振った。

「わかつてゐるつて」

そう言つて笑つた。それが知らず先の展開の予測に沈みそうになる俺のストッパーになる。

「わかつてゐるよ。それでもやる?」この辺

疑問形式のこれは、質問じやない。そのクエスチョンは。

「オマエ誰に向かつて言つてんだよ」

俺が言い切るのとほぼ同時に千代がくつと笑つた。まるで肯定を全身で表現しているようだ。

「俺瞬のそーゆーとこ好き」

「うかがよ。

「お前変わつてんな」

白けた口調で言つてやるが、結局へらつと流される。馬鹿だと感情を込めて一警をして、しかし余計に言葉を重ねるのは止めた。千代のスタンスにもそろそろ慣れた。他人とどう距離を取るのかつて処世術を誰もがみんな、その他人との摩擦で会得していく、多分こいつは折り合い上手く生きることに積極的で、つまりところ俺はそのへんの諸々の事情を放棄していたんだろう。

「エキセントリック。それも一つの側面」

千代が呟いて、遠くを見据えて口角を上げた。それは俺を含めた他者に向ける笑顔ではなくて、内心の感情が自然と表に現れたものらしかった。

何を挑発してんだよ、お前。

平和主義者の優等生みたいな顔を持っているくせに、なんか物足りないのかよ。欲張りな奴。

俺の思考を余所に千代は独り言のように話進める。

「俺たちを見に来るつてなると、本当に逃げるの大仕事だね
ああそうだ。お前にも同じ質問が必要か？」

「大仕事がしたくないならお前だけ今すぐ脱出するつてのもアリだ
ぜ。扉は开けるし、逃げやすいルートも知ってる。付き合えとは
言つたけど無理して俺に合わせる必要はねえ」

最終決断を促す誘惑。これは形だけで、実際には既に俺も千代も
答を知つてゐる。知つてゐるから、これは要するに後戻りしないた
めの誓いを口にし合つてゐるにすぎない。

今まで生きることそのものを規制されていた俺たちは、いつも枯
渴していた。

施設の人間への、『感染者を逃がす』責任問題への気遣いとは別
のところでそれは燻つて、俺や千代を急き立てる。『生きている』
ことを、自分に証明しようと。リスクやスリルを欲してゐる。だから
こそそれ以外の選択肢を潰して、後悔の理由を残さずに、結果がど
うなろうとそれを望んだのは自分だと聞こえる強さが欲しい。

「馬鹿じやん」

俺と一緒に逃げるとさういつと言つだらつと女房に予想してゐた千
代が放つたのは、意外な一言だった。

「…」

不意打ちのせいでの反論しようにも適當な返しが出て来ない。
きょとんとしていたら、なぜか千代の方が発した言葉と裏腹に傷
付いて見えた。そのせいで反論でなくとも俺は声をかける勢いを失
つて、結果的に本気で馬鹿みたいにオロオロするはめになつた。こ
れが傷付き傷付け合いの『ミユニケーション』と呼ばれるそれをサボ
つてきたツケだと言うなら、それも確かにそつなかもしれない。

「あー…、『ごめん』

とりあえず謝つてみる。とりあえず、というのが謝罪する心の有

りようとしてどうなのかと思わないでもないが、この不馴れた沈黙を回避出来るなら背に腹は代えられない。

「瞬が謝る意味がわかんない」

「はあ？」

「じゃあどうしろつづーんだよ。」

「瞬、さあ。俺が先に逃げて、本当にやうしたら瞬は、もひ脱出しよつなんて思わないんじやないの」

確信的な言い方をされて、迂闊に千代に質問を投げ付けた自分の軽率さを後悔した。

「…」

「これに無言で応えるのはその通りだと言つてこるようなものだ。千代が先に逃げるなんて真剣に考えとはいなかつたからさつきの台詞があるのだが、仮にそうなつたとして、その後俺が脱出を試みる可能性は低い。」

脱出、よく考えてみればそれよりも他に俺がやりそつなことに想い到底。

「なんだかんだ言つて人の事氣にするじやん、俺を無事に逃がす方に集中すんじやないの」

「なんで気付くんだ、この…。」

バツが悪い。

否定出来ない程度には千代が言つたそのままに行動する自信が、そんなものなくていいのだがあつた。

ヒーロー気取りなんてそんなカツコイイものではなくて。もしかしてそうしたら、満たされるかもしれない気がして。自分に絶望することを言い訳にしなくて済むならそれは、俺に取つて、他の何より価値がある、それだけの自己満足で、なのに。

「それだけなのに、なんで。」

「一緒に行こうって言ってよ」

千代の言葉が、そうじやない選択肢を提示する。

そつちではなく、もつと暖かな別の場所に行こうと。

もうとっくの昔に目を向けることを諦めたはずの光とか、信じようとしていつだって直前で駄目だと言い聞かせてきた、信頼とか、甘えとか。

俺の心理的な問題なのに俺以外の人間が哀しそうにするのは、どうしようもないのにどうにかしたい、矛盾で構成された分厚い雲のようだつた。それとも『俺の問題』なんてのが、そもそも思い上がりだつてオチなのかもしれないが。

俺の選択によつては、千代が傷付く。そういうことはきっと普通に生きていれば普通に有り得る事なんだろう。あいにく普通じゃないから無関係だと思つていた。

あんなひねくれた言い方じやなくて良かつたのだ。千代は一緒に逃げるのを大前提にしていて、だから『お前はお前で勝手にしろよ』みたいなノリに、無防備に傷付いた。もつと千代を信用して良かつたのに、俺は俺が傷付きたくないからああ言った。

お前だけ今すぐ脱出するのもアリだと。

それは自覚のない防波堤だ。

分かつてくれなんて虫が良過ぎる。

全部じやなくとも心を一瞬でも共有出来るから、人は諍いとか忘れたふりをして、寄り集まつて、密集したつて、なんとなぐ当たり前っぽい感覚で生きていけたりするのだろう。立派なことは何にも知りはしないのに、そんな三文哲学みたいなことをうつかり考えて、阿呆らしくなる。それでも知らないなりに傷付けたくないと願つて、片隅でそんなこと祈りながら、反面冷静になればそれが無茶苦茶な願いだつて十一分に理解しているのも事実。

けど、まあ。千代に防波堤を張るのは、暫くナシだ。

「ああ。一週間後だ。最多的の警備員とついでに客の前で、逃げるぞ」

「了解」

望み通りと言いたげな千代の短い返答は、これから期待が混じ

るせいで言葉以上の響きを持っていた。微かな敵意と挑戦と高揚感。空気を媒体に伝染してくる。

「優等生なんて、奴らの評価も当てになんねーな」

飾りつけのない感想を呆れ半分に漏らすと、千代は何も言わずに当然の笑みをその顔に浮かべた。

当たり障りのないレールの上を歩くように見せかけて、実は脱線している。施設の奴らはこいつを優等生と称して飼い馴らしているつもりでいたのだから、なんともおめでたい。

「…日本人じゃねえ」

「うん？」

部外者が訪れるだろ？と推測を元に、パソコンを開いて数分。

「見ろよ、これセキュリティー保護されたメールだけぞ」

「ええ？ それもハッキング出来んの？ 保護する意味な！」

しつかりツツ「ミミドコロは押さえて、千代が画面を覗き込む。

「英語が、良かつたマイナー系は読めないし俺」

「あー俺はタグに使う単語くらいしかわかんねえ。このメール重要そうか？半年くらい前からやり取りが急激に増えてる」

「ん、うーんちょっと待つて。初めの方から読んだ方がいいかな、半年前、と…」

ぶつぶつ言いながらメールを読み進めていく様は、一見何とも平和な光景だ。

「最初の方は、大した話はしていないね。向こうの学者とこっちの学者の個人的な情報交換つてとこ。その後は……うわ

「なに」

「ここ」、『AX-58』。俺たちの体内にあるウイルスのこと。え、

「あー、bingoだ、瞬」

千代の指がスクリーン上の『AX-58』の文字をなぞって、そのままなぞった先に、あつた。本来なら、書かれる筈のない、名前

が。

S y u n a n d C h i y o

「存在しないことになつてゐる俺たちの名前が出てゐる…これヤバイメールだなあ。ハツキングしてんの瞬じやなかつたら大変なことになるよ。生き残りだとか、施設に閉じ込めてるだとか、暴露しちゃ。俺たちつてプライバシーないねえ。えーっと、で、…突然水を浴びたように千代が青ざめて固まつた。

「どうした」

書かれた内容に危惧が走る。

「千代」

「だから…」

メールに釘付けになつた千代は何かに納得したらしく、音にならないほど小さくそう零した。そして、視線を落としてそれから上げようとはしない。

「千代、何が書いてある」

静かに言った。

「どうせろくでもないことなんだ奴いつ。

「全部…」

「ん」

ちゃんと聞いてる。俺も同じだから、あんまり真に受けんな。

「そういうことだったんだ…」

ああ、ほひ。

「……仕組まれてた…」

期待なんてするもんじゃない。

「二人を無償で引き渡すつて

「どうか。」

「同時に」

「どうか。」

だからつまり、今千代と俺が一緒にいるのは、そのための準備で

しかなかつたのだろう。

俺たちはあるで『モノ』だ。

同時にくれてやるなら、同じ場所にあつた方がいい。そういうことだ。

情が湧いたとか、そんなのは建前で、厄介払いが出来ると諸手を挙げて喜んだことだろう。

研究もし尽くして、もつ用がないのに殺すのは後味悪いからなんとなく生かして。そんな面倒から解放されるのは、さぞ嬉しいだろう。

千代、そんな奴らのためにお前が傷付いたりするな。

「素直にさ、嬉しかったんだ。瞬に会えるって言われたとき」

過去を懐かしむように千代がぽつりと言つた。

「……俺に言わせれば迷惑甚だしかったけどな」

励まし方なんて知らないから、俺は愛想もなく愚痴る。でも過去形で紡がれたその意味を、千代はあつさりと悟つて微笑んだ。

「千代、氣にするな。氣にするほどのことじやねーんだから」「知らぬが仮だつただけで、どうせそんなのは世の中にゴロゴロしている。これまでも、これからもきっと。そんな中で。

「俺たちは選べるんだぜ。仕組まれてる流れに付き合ひのも逆らつのも」

無闇に信じたり夢を見たり、何だつて。

俺たちは自分もつとがむしゃらに自由でいい。

「昔クリアしたテレビゲームのや、」

「……」

「戦闘シーンのBGMが頭の中を流れこんだ、やつやから」

今から緊迫度マックスで逃亡劇を始めるやつて瞬間に、そんなどこか間の抜けたコメントが聞こえてきた。そういう奴だつて分かつていたつもりだったが、どうやら俺の解釈は甘かったらしい。

「千代、リプレイは出来ないんだぜ」

「おっ。ウマイこと言つね相棒！」

なんだそのテンション。

シリアルスモードになつても千代はキャラを崩す気はまるでないらしい。

「今日は満月だよね」

相変わらず不親切な話しこだな。どうやつたらゲームから月の話になるんだ。

「ああそうだっけな」

「雨は降りそうにないね」

「…ああ、そうだな」

だから。

「脱出成功したらヤ、」

ああ。

「ガラス越しじゃない月が見れるよね」

なんかもうゲームとかBGMだとウザイ」と言こやがる、なんて、一気に飛散してしまった。

それがお前の望みか。

儂い。

予定通りに事が進めば、俺たちは6時間後には外にいて、自由の身だ。なのにたった360分先の未来に描いているのは月の光だけ。何を望んで良いかなんて、結局のところ俺にも千代にも分かつたもんじゃない。

閉ざされた十年。諦め方が上手くなつた代わりに、欲しがる方法は思い出せない。

だけビ。

「うわーめっちゃ楽しみだなー。いいなー満月」

これだけ能天気に手放しで喜ばれると、それで良いという気がしてくるもまた事実。

「気楽だなお前は」

「まあねー」

曖昧な声のトーンと伸ばされた語尾が、一層緩さを強調する。

「なんか…、平和だな」

実際の状況は全然平和じゃないのに、それどころかこれから対極を味わうのに、なんだってんだこの緊張感の欠片もない空氣は。

「いいね一人じゃないって」

いつも通りのくだけた言い方で、会話が噛み合つているんだかいないんだかの返事が紡がれる。いつも通りの言い方で、でもそれがいつもより真剣な意味を含んでいる事には気付いていた。

「千代、もし…」

「良くない方は聞きたくない

だが生憎俺は、脱出が失敗する可能性に目を瞑つてそのまま実行出来るほどお気楽じやない。

「聞きたくないなら耳でも塞いどけ。俺は勝手に話すから。けど後で聞いてなかつたとかつて恨むなよ」

「…なんだよそれ。聞くしかないじゃん」

千代は不貞腐れながらもどうにか聞く体勢を作る。

「手短に話すぜ。そろそろ時間だからな」

「出来ればカットしてよ。俺が聞きたくないこと分かつてたるだろ」「二人とも失敗の可能性をか?それとも」

「後者」

言い切る前に即答された。それはどちらか一方だけが逃げ切れない状況に陥る可能性だ。有り得ないとは言い切れないことだ。なおさら今話しておかなければその時右往左往して結局共倒れだなんて、そんな馬鹿馬鹿しい事態を招きかねない。

「はつきり言つぜ。お前が逃げ切れなくなつても俺が行けそうだったら、俺はお前を切り捨てる。だからお前も俺を顧みたりするな」

「冗談だろ」

「冗談に聽こえるかよ?」

挑発するように笑い飛ばしてやつた。

苦虫を噛み潰したような顔つてこういうのをいつのかと、千代の表情を見て思う。だがその不満を汲んでやるつもりはない。

「行くぞ。時間だ」

立ち上がりガラス戸に手をかけて。ゴーサインを出した俺の声は、まるで業務連絡のように硬かつた。

ああクソ、思つてもいい事を言つたせ이다。

「瞬」

凛として一点の振れもなく俺の隣に千代が並んだ。

「今のは聞かなかつたことにしとくよ」

俺を一瞥もせず、千代は硬化ガラスの先を見つめながらそう呟く。

「馬鹿が。前半はともかく後半は聞いとけ」

吐き捨てるように了承を強制する俺を、千代の視線が掠めた気配がして、その後肩を叩かれた。

「 んだよ、」

苛々と向き直ると、千代が人の悪い笑みを浮かべていた。

「失言。馬鹿だなー瞬」

くらつと気安い「メントを寄越して、そこには失笑さえ交っている。

「、なにがだよ」

何が面白いのか、笑いを堪えている千代の顔に心底むかついた。もう知らねえ。話を続けるのが面倒になつてドアを引き開ける。ガチャンと、始まりを示す音がした。ロックの解除コードをホストコンピュータに潜り込ませたのは一時間も前だ。この調子なら他の解除コードも上手く回つているだろ? 幸先良い徵候に少し機嫌が浮上した。

「あのセー、」

勘弁してよ、とでも続きそうな千代の切り出しが、氣急げに俺を引き止める。

「前半は『俺が切り捨てられる話』。後半は『俺が瞬を切り捨てる話』。で? 前半はともかく後半は聞いとけつて? 後半の方が重要? それどうこう理屈だよ。どうせさ、「

失言、って。

「瞬はさあ、人を足蹴にしてクールに決めれるほど器用じやないじやん」

それか。

「見捨てる気ががないならわざわざ言うなよあんなこと。それよりかわ、『俺はぜつて一見捨てないから、千代、お前も俺を見捨てるなー』とか良いと思わない?」「…全く思わない。

「ダセH」

「あー…、うんまあちょっとダサイね。ないね。格好悪いね!」
いやお前そんな力強く認めて良いのかよこの流れで。俺もムスッとしてれば良いのに千代の話の行方が心配になつてつい気を抜いてしまう。

「だる、格好ワリー」

「丁寧に相槌まで打つて。

「まあでもこの際格好とか置いといてさー。」

一強引だな！

華やかな笑顔と短絡的な結論に張り合ひ失せた。

「一緒にやなきや意味ないんだよ」

「気持ち悪い」と言うな意味ならあんだけよ俺にはな
一息に言つ。 そうだ。意味はある。

「一人して脱出失敗に終わるつてのが、一番意味がねえ
嘘だ。

意味ならもう。充分過ぎるくらい。

「なあ、千代。今ここにいるのがお前で良かつたと、俺は思つてゐ
「え、あ、どうも…。いや別に、てゆーか、あーえつと俺もそうだ
けどキヤラじやない事言つなよ、真剣照れるし、なんでだよ」

「お前に会つたから、俺はまともに生きてみる氣になつたんだ」

「いいつてもう。ありがと分かったよ」

自分は当たり前な顔で似たような台詞を吐くのに、言われるのは
居心地が悪いらしい。田を呑わせようともしないで制止の素振りを
見せる。

「けどそれとこれは、別物だ」

違う。同じだからこれ。

「別物？」

「このガラス戸の向こうは、感情論に足下を揃われて楽観視できる
状況じゃないから

「つまり？」

「逃げれる時は逃げる。絶対に振り返るな
千代が溜め息をつく。

「瞬は瞬でしかないってことだね要するに

大方外れとはいが理解して欲しいのはそこじゃない。

「平行線だよ、瞬」

「なにがだよ」

「俺は俺が信じた通りに行動する。逃げたきや逃げるし、…そりゃないなら留まる。瞬だつて、そりだろ」

「…」

言われるまで、気付かなかつた。

無理にでも、千代だけでも逃がしたいのは、俺の我慢でしかない。そんな簡単なことに。

「俺にも選択権があるだろ。俺の未来なんだから」

静かな口調で千代が言う。

「俺は自分を欺いてまで逃げる真似はしたくない。自分を責め続けて生きなきやいけない未来なんて欲しくもない」

同じことを思つていた。1ミリの狂いもなく。

“後悔したくない”。

「脱出に失敗するより、切り捨てるなんて行動をとる方が、きっと後悔する」

そうだろ。千代の目がそう訴える。

共感してしまう為に返す言葉がなかつた。

「俺の未来は俺に任せてよ」

逃げる、なんて言わずに。

「…ああ、そうだな……」

千代にとつて良いだらうと思つた事は、つまるところ俺に都合が良いだけの話だつた。とりあえず千代さえ逃がせれば、最低限の満足は得られる。

とりあえずアイツは任せたんだから。と。

とんでもなく利己主義な言い分だ。それを千代が迷惑がるなら余計に。

「もうなんも言わねーよ。悪かつたな」

信じれば良いだけなのか。ただ。

そうやって、ふわりと笑う真実を。

「じゃ、改めて、行くぞ」

「了解」

ガラス戸の一枚目を抜けて、仰々しく備え付けられた二人分の防護服を視界の端に収めた。恐らくこの先、誰も袖を通しはしないだろ？。

そして一枚目の扉。何もないただの通路。一枚目と三枚目を隔てるこの空間は、「隔離」という言葉を嫌でも思い起こさせる。埃一つ落ちていらないせいでこの体積何立方メートルだかの空間は、空間として存在する事にこそ意義を持つているのだとうさつたくも主張する。感染者と正常者の間に、一体何億の原子分子が介在しているのか。どれだけの空気の層で、俺たちと他者を隔てているのか。あくまでフラットなこの通路は、それ故に遠い距離を物語る。その重たい空気の層を自らの足で蹴散らして行くのは、快と苦の両面を会わせ持っていた。

施設の設計者は、何を思っていたのだろう。届かない世界を見せつけるようなガラス扉。進むほど自由に近付く気がする一方で、何か知りたくない感情が渦巻いているのを感じた。しかしそれも束の間で、俺たちは三枚目の扉の前に行き着く。掠れたアイボリーの、色の割に随分重量のありそうなその扉。

「開けるぞ」「オーケー」

不敵な笑みと共に千代が短く返事をする。俺は自然と口角が上がり、ついでにゾク、と体が脈打つを感じた。

ゲームのBGM。確かに似ていた。

これは、ゲーム。大丈夫だ。いける。

楽しめる。

まさかそんなことを思うとは予想もしていなかつた。もつと悩ん

で頭の痛い思いをしながら逃げなければいけないと。そんなのは拭されて、さつさと飛び出したい衝動に駆られる。

ガチャン。

ガガ…

豪快な音を立て、本来なら全自動で開く扉を力任せに押し開ける。わざわざ強烈な口火を切るのは、今から逃げるといつ合図だ。

さあ来いよ。鬼ごっこをしようぜ。

運悪く扉の前の警備を担当していた奴のぎょっとした顔は笑了た。現状が理解出来ないからかひたすら凝視に凝視を重ね、声も出ず、といった風情だ。

「あっ、どおも。感染したら『めんね！』

千代がしつれつと言い放つてその後の警備員の反応に吹き出しそうになつた。

そりやあ感染する可能性があると信じてればあんな反応もあるか。バタバタしているだけで100パーセント無駄な動きだ。おまけに「ぎやあ」とか「わあ」とかおよそ人間らしくない言葉の連続で、たまに聞き取れても「そんな」、「いやだ」、「そんな」と端的な台詞が漏れるのみ。

人が悪いぜ、千代。

当の本人はにやりと俺に目配せただけで、別段悪びれる様子もない。軽い足取りでひらりと先へ進んでしまう。警備員を氣の毒に思うが「感染しない」と言ったところで何の効果が得られるでもなし、そもそも俺の言葉を聞き取る余裕すら欠いているだろう。

まあ発症しないのは時間が経てば分かることだし。

数時間か数日、死の恐怖に怯えなきやならないのは、俺たちのこの十年と照らし合わせてキャラにして欲しい。

千代の軽い身のこなしが臆することなく前方へ向かつて行つて、その後ろ姿を捉えながら俺は監視カメラの位置をチェックしていく。カメラはハッキングした位置関係通りに設置されていて、ああ今千代はカメラに捕らえられたはずだ。続けて俺も。これが駆け引き

の第一段階。どこに向かっているかをモニター室に教えてやる。

(瞬と千代、今すぐに止まれ)

施設内に放送の声がかかつた。

止まるか、ばあか。

止まる気配のない俺たちをモニターで確認してか、再び同じ台詞が耳を突く。

(繰り返す。瞬と千代、今すぐに止まれ)

一邊倒か。芸のない呼びかけだな。

放送を無視して走る先は、この施設のセキュリティー統括本部。一番人員も多く、守りも硬いその部屋は、俺たちと外の世界を決定的に隔てる壁だ。それを突破しなければ大地は踏めない。

(停止しろ。瞬。千代)

俺たちの行き着く部屋に思い到つたらしい声が、ただの苛立ちと呼ぶにはいくらか度を超した口調で言い放つた。

停止…。

まるで人間扱いされていない。

自分の唇が嘲笑の形に歪む。

ヘタクソ。

そんな事を思った。俺たちを止めるには浅はか過ぎる台詞だ。逆なでする、とは気付かないのか。

(今停止すれば咎めない。なかつたことにしよう)

ハ。

咎めない…か。つまりこの行動が“罪”か。

俺たちが施設の外で呼吸をしたいと思う事は、なかつたことに出来る程度の話か。

しかし怒りより先立つ感情があつた。

「ラッキーだね」

千代が余裕の笑みで振り返つてそう告げる。それは推測が確信に変わった瞬間だった。

「ああ」

奴らは、俺たちを対当に見ていない。あの話し方は明らかに自分達の側が有利だと信じているものだ。その驕りは隙になる。

どうせ逃げられやしないとタ力を括っている。セキュリティーは万全で、まして警備の人員も普段の倍以上。大方『間の悪いとき』に脱走したもんだ』とか呑気に構えているというのが関の山だらう。現状の過信。責任が分散されれば注意力も散漫になる。

「正面突破するぞ」

「a 1 1 「i age t!」

「日本語使え」

こんなときまで…と睨み付けかけた動作も、千代の浮き足立つような少し紅潮した笑みにかち合つて消滅した。

「…落ち着け千代…」

走りながらじやなければ溜め息の一つ一つ漏れるとこうだ。

「…今まで冷静さを欠いたら結局プラマイゼロじやねーか。

「うんごめん！」

「ごめんじやねえよ。全然落ち着けてねーじやねーか。

「気張り過ぎ…」

「瞬はクールすぎ」

はしゃいでいると形容して差し支えない千代の弾んだトーンに調子が狂う。

「冷静に越した事ねーだろ」

千代の返事を聞く前に、機械の作動音が耳に届いた。

「何の音？」

千代が前方後方ひと回りをぐるりと見渡す。

「手動のセキュリティーを作動させたんだろ？。気合い入れて走れ詳しい説明をしないでも一秒後には何が起ころのか分かる。

「うわ。趣味わる」

千代にかかると「趣味わる」の一言で一掃されてしまうそれは、言つ間でもないが決して趣味で作られたものではない。目測10メートル強の感覚で通路が遮断されていく。シャッターなんて可愛ら

しいものでじゃない。壁の上下から、規則的に並んだパイプのような突起物が出現して、それが互いに合わさっていく。

「檻じゃん」

見たままを千代が呟いた。

「いいから行けるとこまでは止まるな」

大層な仕掛けであつても今まで一度だつて使う機会はなかつた代物だ。いくら10メートル毎に設置してあつても肝心の操作がマニュアルではスムーズな作動は難しいだろう。それを裏付けるように檻の形相を示している場所はもう遙か後方だ。前方の天井と床を見る限り、同じ仕掛けが埋まつているのはほぼ間違いないだろうから、それが動かないのは単に操作者の不馴れが原因だろう。

俺たちが通路を走り抜ける時間と、操作完了までの総合計の時間を算出できていない。ぎりぎりで行く手を阻む筈が、ただ俺たちの後追いの遮断に留まつている。

けどそろそろ…

止まるなと言つた手前多少氣まずい氣もしたが、一秒を争うから何も言わず千代の腕を思いつきり引いた。

「うわっっ

反動で千代の実際の体重以上の力がかかつて、俺も千代もほとんど同時に尻餅をつく。

「つ！なに…」

なにするんだよと言いかけた千代が言葉を呑み込んだ。

目の前の檻が、すごいスピードで閉じられたからだつた。ゴウンと腹に響く音が通路を揺する。あのスピードで閉まるその渦中にいたら、上からと下からのパイプに巻き込まれるのは必至だつたろう。その最悪からは逃れたが結局俺たちは檻に行く手を阻まれる結果になつた。かといって引き下がる気もないから、すぐ後ろのまだ閉めるかどうか考えあぐねているような檻が閉じられるのも時間の問題だろう。要するに俺たちは10メートルそこそここの通路に閉じ込められたということだ。

「ありがと、…って、これ…殺す気かな」

あのまま千代の腕を引かなかつたら、そうなつていた可能性がないとも言えない。

「串刺しか。シユールだな」

それでもこの方が、にこやかに送り出されるよつよつぽど真実味がある。

現実は、そんなもんだ。

「シユールじや済まないつて、やりすぎだよ」

呆れを通り越してマイナスまで下がつた千代の声は幾分か冷たい。確かに目の当たりにすればその『やりすぎ感』は否めない。否めないが、想定はしていた。逃がすくらいうら、死を。感染者の存在を明るみに出すくらいうら、たつた一人殺すくらいうら……。

感染者である俺たちがわざわざ自分は感染していると吹聴するのもおかしな話だが、じく僅かでも不安要素があるなら摘んでおきたいというのがお偉いさんの見解だらう。かなり不本意だが、俺はそれが理解出来る。本質的に俺も合理主義者だからだらう。社会の滞りない循環のために、黙殺すべきものがこの世にはある。その一つが俺たちだつただけのことだ。国内だけならまだしもグローバル化が謳われて昨今、脅威のウイルスを蒸す返すのは他国の目を意識しても封じておきたい痛手だらう。

そこまで考えて、ふと思い出す。

あのメールのやり取りは、海外とだつた。

それは。

「ついに閉じ込められちゃつたね」

千代の声で現実に引き戻された。振り返れば背後2、3メートルのところで、規則正しい間隔を開けて床と天井を繋いだパイプが鈍く光つている。

マズイ。

「瞬?」

「ああ、…」

迷いが生じている。

本当に、逃げて、良いのか。

「どうした？」

俺は何か大事なことを、見落としているんじゃないのか。

「瞬く、どうしようか？」

檻の中だなんてのは何処吹く風で、千代の口調はふわふわと軽い。こいつが頭悩ませてゐるのに、へらへらしゃがつて。多分これは俺の勝手な感情だから千代に非はないのだが、……」しつこい感情を世間では『逆切れ』とか言つらしげが、呼び方なんてなんだつてい。ムカつくことに変わりはない。

「うつせーな今考えてんだよ…」

考へてるのは脱出の方法じゃなくて、今更『逃げるべきか否か』と
いう間抜けな問題。

「うんじやあ俺も考えよ」

「いやお前は考えなくていいから」

下手に名案を出されたりなんかしたら「やつぱり逃げるのやめる」
なんて言いつくて仕方が無い。そもそも現時点で既に十分言いつて
くい空気が出来上がつていてるのだ。

「なんで。瞬に任せきりなんて俺すげー良心痛むし」

アホか良心痛めなくて良いんだよじつとしてろぼーっとしてろ何な
ら寝てろお前。

(瞬、千代。妙な動きはするな。大人しく戻るなら今回のことは見
逃す)

なんだかんだコイツらもノリノリだしな…。

俺たちの受け渡しは海外との取り引きで、もし万が一俺たち感染者が消えたら何が起つる?

「見逃すつひや。お氣楽発言だね」

ああ、けどお前ほじじゃねーよ。

馬鹿だつた。取り引き相手くらい洗つとくべきだつた。俺たちが消えたらまづどこに漏れる?どのくらい騒がれる?

(今からそこへ向かう。繰り返すが妙な真似はするなよ)
マズイな。時間がない。

B級メディアにすっぱ抜かれるか、もつと悪けりや感染者の生存を信憑性最もしく有力メディアに載せられるか。お咎めナシ、つてのは有り得ないだろ、さすがに。

「……瞬、」

だからちょっと黙つて…。そう喉まで出かかつて、しかしここにない千代の硬い声にふと顔を上げた。

「！くそ！テメーら狂つてる！…！」

一息に吐き捨てる。檻の向こうに自らを守る為の感染防護服に身を包んだ施設の奴らが見えた。それから明らかに殺傷能力が高い銃口がこちらを向いているのも。

「冗談きつい…」

俺はお前のそーいう諦めきつてるみたいな冷ややかな笑顔好きじゃねーんだよ、千代。冗談だなんてこれっぽっちも思つてねーくせに。やつてられない、とか。どうでもいい、とか。そんな風に見える。

「千代！逃げるぞ！」

もう知らねえ。施設の管理者たちが、傷付かなきゃいいつて俺はつと馬鹿げたこと考えてた。

『撃て！構わん！』

『は、どちらを、…』

別に誰だつて事情があるだろつ。責めるのも下らなかつた。

『瞬だ、あいつが千代を唆してん！…』

別に怒りとか感じたことも無かつた。

『撃て！…』

『 、はー。』

けど今は、すげー哀しいよ。

『 なつ、なんだこれはー!?』

白い煙が吹き上がる。

わざわざ武装したのにあいにくだが、俺は保険をかけずに逃げ出すほど香【氣】じゃない。

「千代、離れるな」

「えつ? あ、わかつた」

勘違いしてんだよ、あんたたちは。ここはもつあんたたちのテリトリーじゃねえ。

『 スモーク! 瞬か! ふざけるな! ! ! 』

なあふざけてるのはどっちだ?

『 待て、撃つな! 危ない! ! ! 』

危ない。その表現は間違ってる。

気付けよ、リスクを負えないことそのものが、リスクを生み出すってこと。

ガコン。

ガー……

『 何の音だ……』

白々しいね、この音の正体なんて一つしかないだろ。

「行くぞ、千代」

「がつてん! 」

白に覆われた視界の中で、見えない千代の腕を引いた。千代が笑う気配があつて、俺も笑う。

閉じられていた檻が解除されていく。ここは表向きは敵の要塞。だがほとんどデジタル化された設備のおかげで、実際には俺が仕掛けたおびただしいトラップが埋まっている。撃てないなら正面突破に躊躇いはない。

「走れ千代」

「瞬かつこいー」

ああそつかよ。その「メントは悪くないな。

「千代速度落とせ。確かこの通路…」

言いかけた直後にドゴッと鈍い音がした。

「「」の辺で右に曲がってたような、……、遅かつたみたいだな」
今のはあれだな、お約束つてやつ。

「……うん…激突した…」

だろうな。笑顔のまま突っ込んだのか、気の毒に。

「やべー 鼻血出たかも」

「おい走りながら聞くから、とにかく曲がって進め」

「あはは鼻血出しながら走るってミラクルだね」

自分のことだろうが。

「なんでもいいから走れ」

「走ってるつて。ちょっとは心配してよ」

「……」

「瞬一 おれ鼻血出しながら走つてんだよ、プライド捨ててんだよ、
安否確認してよ」

間伸びした口調だから本氣で言つてる訳じゃなことくらいこは察せるが、いかんせん面倒臭い。まず千代がそういう種類のプライドを持つていたのにびっくりだ。とにかく安否確認の必要は全くもつて無い。

「瞬つてば、…………。「めん、せめてツツコミを入れて下さい」」
はあ？ 捱めねーよ距離感。まあ何か言つとくか。大分クリアになつた景色の中で振り向く。

「千代、わりい……、つて、鼻血出てねーし」

「あつほんとだ。よかつたー」

やつてらんねえ…

「楽しいね」

言葉の割に真面目な響きを持つて、それは千代の口から漏れる。

「そりやよかつたな」

「うん。楽しい」

命懸けなの！」。

樂しいって言葉は、もつと違つシチュエーションの為に用意されるもんだと思つてた。

「行くぞ。感想なら後でいくらでも聞いてやるよ
分かつてると言つように千代が笑う。砕けたその仕草が好きだと思つた。

「瞬！止まれ！！」

進む先で、真正面から切羽詰まつた声を上げたのは見知つた顔だつた。白衣の男。俺と千代を引き合わせた罪深い一人。

「せんせえ、いいの？感染するよ」

そんな風に無防備じやあ。ゆっくりと歩み寄る。

「もうお前も知つてるだろ？瞬。感染はしない」

俺と対照的に足を止めて、ひとと自分を見据える千代をちらりと見て、男はそう言った。

「あなたの考へてる」と……分かんねえ

知りたくもない。

「分からぬままでいい」

無表情に言つた男の目元が幾分か和らいで見えた。それは時が経てば、気のせいと振扱えるほど僅かな時間の表情。

「あなたは本当に俺たちを止める氣あんのか」

「どう思つ」

「……知つた」ちやねえよ

恐らくもう、この男と会つことはないのだろう。漠然と知つた答に、懐かしい痛みを感じた。

「恨んでるか

この場所の全てが、過去になる。

「別に」

「お前には、俺を殺す権利くらい、あるんじゃないのか」
そうかもしけないし、違うかもしえない。

「……アホか、テメーは」

俺が言うにしては棘の抜けた口調だった。多分言つた自分が一番びびつた。

「、権利なんて、どうだつていいことだ。だいたい今俺たちは急いでる」

この男は好きじゃなかつた。嫌いじゃなかつた。

「そうか、そうだな……」

安心したような、同時に傷付いたような声を落として、それでも男は何かに納得したようだった。

「なあ、」

白衣の男に声を放る。僅かに過った疑念。
なあ、もしかして。

「……あんたも逃げたいのか」

俺が低く呟いた問いに、大人しくしていた千代が視線を移す気配があつた。しかし男は黙つたまま。

「…違うんだつたら、別にいい」

引き下がつた俺に何か言いかけた男が実際口にしたのは、多分言いたかったことではないだろう。

「エマージングディジーズ。E、m、e、r、g、i、n、g
D、i、s、e、a、s、e」

「なに?」

「Emergency Disease。覚えて行け」
行け。

そう言った。分からることは分からぬまま。多分これは、墓まで持ち越しだ。どうせあんたは言わないだろう。残される男に何が残るのか、俺は知らない。

引き止めるべき立場にいながら道を開ける理由、意味。

分からぬ。それを盾にして、男の言つまゝに道をすり抜ける自分も。

隣を過ぎる瞬間に白衣の男は確かに笑つた。
心から、満足げに。

「瞬、先へ進もう」

千代が言つた言葉が、物理的な話なのか精神的な話なのか判断出来なかつた。

ああクソ、違う。そうじゃない。

一度は男を置き去りにして、だけど。

覚悟決めました、みたいな白衣の元へ数歩戻つて、その腕を力任せに引く。

「、瞬、なんだ、……」

「あんたも来るんだ」

「は、何言つ……」

「早くしろよ！時間がねえ！」

撒いて来たばかりの武装した奴らが、男を撃たないなんて保証はない。

「だから俺はお前たちを逃がす為に——！」

「くだらねーこと言つてんじゃねえよ——！」

殴つてやりたいがそんな暇もない。

「俺たちが生きる為に犠牲になるのがあんたなら、あんたの自己満の為に犠牲になるのが俺たちだ。どつかで見たような泣ける話なら、俺と関係ない」といやつてくれ

千代が苦笑した。のどかなホームドラマで見るような、苦さなんて欠片もない苦笑。

「早くしなよ、おじさん。撃たれたくないでしょ

そしてついでに半分呆れたようにぼやく。

「やっぱ甘いよ、瞬」

それでいいと認めるような言い方だった。

「うーん時間潰したね。視界良好だよ」照準を合わせるのにも問題がないほど。

「テメーのせいだ、せんせえ」

背後を振り向けば武装した施設の人間。毒づいた俺に白衣の男が息を飲んだ。

「……どうして、……」

「ああ、」

仕方ないだろ、生きてる気がするんだ。

「せんせえ面白いのかよ、勿体ねえな」「うん、もつたいない」

千代が柔らかな口調で繰り返した。

優等生より、共犯者の方が魅力的だ。そう言つたあの時と、同じ顔をしていた。

「市谷、どうこい」とだ

武装した一人が白衣の男に向かつて言つ。

イチタニ。十年近く俺の側でうろちょろしてたこの男の名前を、俺は初めて耳にする。市谷、それが『白衣の男』の名前らしい。馬鹿な話だ。市谷は、自分の名前も明かしていない。俺も聞いてみたことすらない。人間のために、逃げ道を開けたのだ。

「瞬と千代を会わせたいと言い出したのはお前だつたな。拳げ句逃げる手伝いか?」

市谷は暫く沈黙して、何の事件も起こっていない普段の、冷徹そのもののような無表情を分厚い防護服に向けた。

「まあ、そんなところです」

あまりにさらりとした発言だった。

相対する暑苦しい防護集団の前で、市谷の軽そうな、言い換えればとてつもなく無防備な白衣が涼しそうに揺れる。

「いい加減、うんざりしていたところだったので。監禁趣味は私にはありませんし」

銃口が、こちらを向く。

体の奥で危険信号と拍手喝采が混じるような、ビッち付かずな高揚感が沸き上がった。

せんせえ、あと二分、伸ばせ。

危険なくらいが、いい。

過ぎていく刹那は全てギャンブルだ。

息をすることも。

「市谷、感染してもいいのか」

今喋った奴は下っ端か。感染しないと知らないらしい。

「ああ書類読んでないんですね。そんな動きにくいもの着込んで。いや、あれは最重要機密でしたっけ」

施設の人間をさっぱり覚えていない俺には、どいつが上司でどいつが部下かが分からぬ。じゃなければ全部替えのきく駒か。どのみち顔まできつちり覆われた防護服では判然としない。

「書類？」

「あー…、知らないならその方が良いでしょ。こちらには資料が回っていないうですから」

資料が回ってくるとしたら、恐らく千代が居た施設から。

「何の話だ、資料とは？」

「内容を要約すれば今現在あのウイルスは差し迫った脅威ではないということにしてね。問題はウイルスよりそれを取り巻く人間のほうですよ。まあそれは…、現状を見れば明かではないですか」

市谷は淡々と話しながら、目の前の防護服と凶器をざつと見渡した。見られた何人かが小さくたじろぐ。

（市谷、黙つた方が身のためだぞ）

威圧的な声がスピーカーから流れた。

：今更、

市谷の唇がそう動いた。声が聞こえなかつたのは、それに被さるようには非常警報が鳴つたからだ。

俺は千代に目配せする。

視界を奪うのは何もスマートばかりじゃない。もっと原始的な方法で事足りる。

照明が落ちた。

鳴り響く警報がどんな音よりもここに相応しい。

視界はきかないが、セキュリティー統括本部に近づくにつれて警報は小さくなる。本部の人間がそこだけ警報を切つたのだろう。事態の対処をするために。対処するべき事態が『感染者の脱走』だと分かっていて、しかも主電源が他と違う統括本部は照明も落ちていない。施設内にいる人間が外に出るためににはそこを通るしかないから、罠を掛けるなら当然そこで十分だ。それに感染者が辿り着くまでには少なく見積もつても10分ある。

そんな圧倒敵有利な状況で、ネズミ捕りを仕掛けない奴なんているだろうか。

一応のところ武装集団は巻いたようだ。それでも俺たちは暗闇を走る。と言つても全速力つて訳にはいかない。

今更イチタニを放り出してくつても、……ねえよ。確かにその選択肢は。確かに。ばこんつ、がこつ。

ああ、それはそなんだけど。

「瞬一。イチタニさんがちょっと、その……」

せんせえ。勘弁してくれ。

「つて！」

ばんつ。どこつ。

マジかよ。

「瞬……、ちょっと、……待つてあげたり、とか、……」

千代が躊躇いがちに俺を伺つてくる。

「しねーよアホかテメーは！一刻を争つてんだよ！止まんな走れ

いるのかホントに。」「……、運動神経皆無、って奴は。よつこによつて、こんなことに。」

！」

「いいんだ千代、瞬、先に、行って、くれ、…はあ、」

市谷が弱々しく咳く。後半の息切れは、なんだ、聞かなかつたことにして大丈夫な種類のボケか？オイどうなんだその辺、勘弁してくれよ。

「行け、気に、…はあ、はあ。する、な、」

「格好つけんな、格好ワリーんだよオッサン！！」

我慢できずについ叫ぶ。照明を落としていくら姿を隠したところで、こんな大声でツツコミ入れては台無しだ。俺はここだ。さあ撃てよ、どつからでも。どこぞのアクション映画じゃないんだ、そんな茶番は願い下げだ。巻いたからといって声が聞こえないとは限らない。だが言いたい。せんせえあんたとんでもなく足手纏いだ。なぜ真っ直ぐ走れない。

ひらりと軽快な白衣を、それこそ悪くないと思つたのは数秒前だ。しかしそれは過去だ。数秒前を懐かしむなんて気が滅入る。振り返つても市谷の表情は伺えない。真っ暗だからだ。だから市谷は走れないのだろう。見えないから。勘と…、やつかいなことに体力っていう根本的なものにも問題がありそうだ。ばんつ。それにしても一体何にそんなにぶつかるんだ？

「せんせえ、あんたも銃持つてんのか？」

市谷が奮闘しているであろう方向に見当をつけ話しかける。がこつ。

「…、いや」

否定らしき言葉が返つてきたものの、直前の間は多分息切れのせいじゃない。

「それは、『今は』所持してないって意味であつてるか？」

つまり持つ持たないは各自の判断に委ねられるにしろ、施設の人間それぞれに銃が行き渡つていたという意味で。

「ああ、すまない」

右の方で千代がふつと笑う気配があつた。まったく、俺も笑いたい気分だ。すまないだつて？その謝罪は、銃を向ける対象がおれたち

だつたという以外解答を持たない。

まあいいけど。俺も千代もまだ生きてるし、何にしきこひつけは撃たなかつた訳だし。とにかく、今のところは。

「驚異だな、……」
走れる、つていうのは

市谷が言った。

「……普通だろ？……しゃあねーな、30秒だけ止まつてやるよ。
つとに、命取りになつたら謝れよマジド」

進むのを止めて溜息混じりにぼやくと、市谷はせつぱり有り得ない選択肢を提示する。

「だから、先に行け、つて。命取りになつたら、責任の取りようがない」

「はあ？別にそんなの期待してねーから安心しちゃよ」
市谷に取つては良い知らせだらう。俺は責任を市谷に要求するほど呆けちゃいねえ。

「だが、……」

ああ面倒臭いな。

「イチタ一さん、暗くて見えないからあなたには分からぬかもしれないけど、瞬が『だがもクソもねーよ』つてすんごいイライラしてるから、今は黙つて息を整えてくんない？」

千代の実況中継みたいな要求が事実そのまま複雑だ。プラスお前だつてイライラしてんじゃねーか、千代。口調が固まつてるぜ。

「わかった。……悪いな」

市谷がそう言つてやつと黙つた。

なんなんだよ。

市谷には一生わかんねーんだろ？ 良いとか悪いなんて、俺にしてみたらどうでもいいことだ。市谷が悪いのか、俺たちが悪いのか、他の奴らが悪いのかなんて、結局は主觀の問題だ。言い分がなきや善悪は存在しねえ。言い分があれば反対意見が悪だ。世間が正義を主張するなら、俺は悪でも構わない。

「ゆっくり歩くなら問題ねーか？俺の距離感が間違つてなきゃ統括本部まであと2、300メートルってここだぜ。この先3回左に曲がつたらつぶはすだ」

暗闇と沈黙とゆつたりした足取りで、自分と世界の境界が溶けていく気がする。代わりに思考の働きが妙に活発だ。

存在とは、なんだ？ 存在を抹消されている俺たちは、『存在している』ことになるのか？

俺は生きているのか？ 死んでいるのか？ 生の定義はなんだ？ 俺を構成しているものと、他者を構成しているものの違いはなんだ？ 人間とそれ以外の違いはなんだ？ この世界はなんだ？ 現実か？ 幻想か？ どこまでが俺の思考で、どこからがそうじやない？ 始まりと終わりは？ 時は止まっているのか？ 動いているのか？

俺のしようつとしていることは、一体なんだ？

「瞬
千代。

「光が見えるよ」

幻想でもいい。

悪くない。俺の目に映るものは、上がつても下がつてもこの世界だ。

セキュリティー統括本部……これが……。

光が漏れていたのはここからだ。

なんだ。気分が悪い……。

「瞬。大丈夫?」

ここには光がある。だから見える。たった今気付いたことだが、『見えるから幸福』だというのは間違いだ。

俺はずっと閉じ込められていて、だから本当は世界に何があるのかなんて覚えてなかつた。

人が何億人いるなんて情報は、俺の中ではパソコンのスクリーンに映る单なる光の集合体でしかなくて、そのパソコンを作り出したのが人間だつてことも、正直実感したことなんてない。

「千代、お前はここを通つて来たんだよな」

そう言つてから、突然この施設の壁は音を反響させないと氣付いた。自分が発した台詞が、乾いていて空しい。これは愚問だ。そんなんのは聞かなくても分かつていて、外と施設を繋ぐ場所はここだけなのだから。

千代は微かに笑つて俺から目を逸らした。その視線は俺たちが進るべき方向に向けられる。千代にとつては、一度は『入る』ために通り、再び『出る』ために通るはずの、その部屋に。

「瞬、これがこの施設だ。つまるとこ人間の狂氣だな」

市谷が自嘲氣味に告げる。

部屋そのものが一つの機械と言つても差し支えなさそうだ。相変わらず通路と部屋を隔てるのは透明な防弾ガラスの扉。部屋の壁面は壁じゃない。無数のパネルだ。青に近い色をした反射パネル。鏡でもない、ガラスでもない、何かエネルギーを吸収するような、それでいて跳ね返すような、気味の悪いパネル。

部屋の中心に馬鹿でかい塊がある。赤いコードの絡みついた、重そうな、塊。何かの機械だ。なんでか知らないがそれは鎮座した爆弾を思わせる。

なんだよ、クソ。夢も何もねーな、この場所は。

この施設に漂つていてる空氣は、どちらかと言つと死を連想させるものだ。もつと俺の感情に即した言い方をするなら、『息をしていない』を連想させるもの、だ。全く……残念ながら俺は『死』と『息をしていない』が同義語かどうか知らない。そもそも機械が『生きている』のか『死んでいる』のか、それすら多分『どちらでも在つてどちらでもない』のだと思うくらいだ。ついでに人間も同じようなものだと言つてやれば、大半の人間の重荷は降りることだろう。無言の市谷をちらりと窺えば、ほとんど死人みたいな顔でガラス戸を見ている。

俺も千代も生きているつていうのに、あなたの重荷は本当にそんなに重いのかよ。もし下らない勘違いであなたがこの先押し潰されたとしたって、俺は絶対に笑つてやれないんだぜ。頭は悪くないんだううけど、だからってその辺分かる気はあんのかよ？

と、言いたいような言いたくないような、こんなことを言つたら若干『良い人』っぽくて気持ち悪いような気がしないでもないから、言わずにおく。けどせんせえ、俺はあんたを恨んでない。だからそれでいいじゃないか。

「人、いないね。罠かな」

千代が言つた。そう、セキュリティー統括本部に人影はない。

「ああ、100パー そ うだろ うな。分 か りや すく ていいぜ。普段通

りだつたら逆に怖え」

人の気配がないから余計死んで見えるんだ。後ろに撒いた奴らも残して来たつてのに、お偉いさん方はもしかして施設ごと破壊する気かもしねりない。

カツ、カツ、カツ。

突然耳慣れない音がした。なんだ？

「…あいつ、…」

市谷が悔しそうに囁く。無意識に口走つたらしく、俺にも千代にも聞かせるつもりはなかつたようだ。

そして明るい機械塗れの部屋に現れたのは、市谷と同じように白衣を着た、恐らく二十代後半の女。カツ、カツ。ヒールの音。俺たちに気付いていないようだ。女が部屋の中心の機械に触れる。まるで壊れ物を扱うように、指先から手の平へ。静かに、ゆっくりと、何かの儀式のように。そのまま女は瞳を閉じて唇を小さく動かした。短く呟いたようだったが、何と言つたかまでは分からぬ。あるいは、こう見えた。ごめんなさい。

瞳を開けて顔を上げた女は、別の世界に居るようだった。白衣のポケットから銃を取り出す。真っ直ぐに立つたその姿が、未来と過去を遮断する。

何もかも。今だけのために。

こんな部屋に留まつて、一人きり。銃。懺悔 この女、俺たちを殺す気なのか。それとも 。

市谷の拳に力が入つてゐるのが見えた。

「先生、あの女は知り合いか」

「ああ」

「仲は？」

その質問に市谷が苦笑する。正確には、苦笑しようとして出来ずに消えた笑みの名残だけが、表情に浮かんでいた。

「悪く、ないな。向こうもそう思つてる筈だ」

「恋人か？」

「さあ……、どうかな……。もっと殺伐とした関係だったかもしねれない」

「あいつ、あんたの『恋いつこ』と聞くか？」

「いや、」

重たい苦笑だな、本当に。

「お互いの領域を侵害しないのがルールだつたんだ、俺たちは」

「そうか」

だとしたら、ちに手札はない。

「あの女、どう出ると思つ」

事前策は市谷の意見を聞くくらいか。心許ないが仕方ない。思案した市谷が諦めたように口を開いた。

「答えない方が良い問い合わせだらうな。あいつなら、何をしても納得がいく」

「平和的な解決を望むよ、美樹」

ガラス扉を開けて入り口に立つた市谷が小さく零した。アナログの鍵も掛かっていないということは、俺たちがこの部屋に入るのは予定内なのだろう。美樹と呼ばれた女が無言でこちらを見る。市谷、千代、俺へと視線を移して手にした銃を僅かに握り直す。

視線のあつた俺に向かつて腕を持ち上げ、すっと銃口を向ける。俺はなぜかその場に張り付けにされたようで、体が動かない。女が俺に向いているものが殺意なのか疑問だった。躊躇いも無く引き金を引きそうでもあり、それでいて撃つことなど絶対になさそうでもある。

「美樹、流血は見たくない」

『美樹』が銃をこちらに向けたまま視線を市谷に戻す。そしてこの状況から一番遠い種類の柔らかな笑みを浮かべた。

「そう……。美しい台詞ね」

「…美樹」

「少年みたい。本当のところね、私は貴方の…ずっとそれに焦がれていたのよ」

『美樹』の穏やかな口調は、過去を懐かしむ。

「私たちは既に量り知れない流血の上に生きてる。でも貴方は、血に片腕を浸しても、残りを暗闇に売り渡したりしなかつた。…私と違つて」

「美樹…、もう惨劇を重ねるのは辞めよつ。、なあ、…、美樹、頼むから、…、美樹」

市谷のどこか焦りの混じった声。何か察しているようだつた。胸騒ぎに心臓が強く脈打つ。

胸騒ぎの原因は、『美樹』のふわりと諦めに似た微笑。

「出来ないよ……」

「美樹、」

「無理なの。何もかも間違いだつたって、もう、分かり始めるから」

誰かこの女を助けてくれ。

「美樹、止めてくれ…」

俺から逸らした銃口を自分のこめかみへ。

違う。それは違う。死のうだなんて、やめてくれよ。どうして、どうして、どうして。

突然現れて、分かつたような顔をして。分かるように説明してくれよ。心の中では言いたいことが溢れてくるのに、声を発したら終わりな気がして、少しでも動いたら世界が止まってしまう気がして、ただ俺は果然とすることしか出来ない。

「私は…もう戻れない」

笑うな。行かないでくれ。

「……美樹…」

『美樹』が愛しそうに笑った。

「ありがとう。出合えたことを感謝してる。…貴方への感情は愛じやなかつた。

でもどうしようもなく好きだつた」

ぱん、とどこかで音がした。

どさりと『美樹』が倒れる。

見れたものじゃない。

血溜まりが広がつて…。

血、つて、こんな色なのか。終わりか。これで。

この女の人生は、ふつつりと切れたのだ。これが、終わり。

そうか。

世界は動いているのか。

無関係なのだ。

この女の死とそれ以外は。

馬鹿な女。

「なんで、わざわざ俺たちの前で死んだの」
千代が呟いた。女が答えることはない。赤い血溜まり。こめかみを
撃ち抜いた死体は、ドラマを誘うような哀愁など無い。立ち尽くす
俺と千代と、市谷。振り起こしたり、泣き叫ぶなんてことはない。
何もかも、塵一つさえ宙に固まっているようだ。

「こんなのが欲しかったんじゃなーい……」

無表情の千代が言った。

何の感慨も湧かない。

神なんているのか？

まだ暖かい血液が、地を滑っていく。白衣の白が赤に変わる。

俺たちが自由になる代償。間違ってるのは誰だ？

短い言葉で先を促したのは市谷だった。
なんで、あんたが。

「行くぞ」

俺がこんなことしなきゃ、この女はまだ。
ふざけるなって、狂氣の怒りに任せて俺にその銃を向けたって、俺
は別に驚いたりしない。それなのにそつならないのは、きっと市谷
が肩代わりしてくれているからだ。

俺たちが隔離されていたこと。脱走という背徳。『美樹』の死。俺
が知らない、正しいと言えないこの世に溢れた数えきれないこと。
矛盾の穴埋めみたいな犠牲。そういう時代で、そういう社会だとい
うこと。

ただの一言も責めないのか。俺たちを？自分が被害者だと言い切る自信がない。

これじゃない。それじゃない。どれでもない。俺は役に立たない。

「瞬」

市谷に呼びかけられる。

せんせえ、あんたが俺にかける声は何ていう種類だ？

愛なんて知らねーけど、この女が大事だつたんだろ。なあそつだろ？そのくらい、何も分かんねー俺だつて気付くんだけ。俺はどうすればいいんだ？『美樹』、あんなに優しそうに笑っていたのに、なんでそういうことを教えてくれなかつたんだ。

俺たちに最後のチャンスをくれるくらい、たつた少しだけ気前良くしたつて悪くなかったんじゃないのか。

なあ分かんないんだろ。その血の中じや、俺たちの、『戻つて来てくれ』、なんて。

多分今ここにある、どうしようもなく歪な感情のかたまり。もう見ることは出来ないだろ？けど、もしかしたらこれだつて。違うのか？

愛と呼ぶかもしないのに。

無力だなんて知りたくない。

「瞬、これとお前とは関係ない」

市谷が俺を気遣うように言った。

「……どこをどうしたら、そんな台詞が出てくんだよ。あなたの恋人を殺したのは、俺だ」

道徳なんかいらない。俺には、必要なんだ。生きていぐのに事実と結論が。

「……きついなあ随分……」

千代が独り言みたいに言った。悪い。でも今俺にはそれが必要なん

だ。

重い、そんなの分かつて。市谷、出来ればそれを、俺に背負わせてくれ。庇わずに。『辛い』とか『痛い』だつて、俺のものだから。生きてりや欲しくもないもん抱えなきゃいけない時だつてあるだろ。生きてんだから、そうだろ？

頼むよ。どんなやり方だつていいから、生きてるつて、教えてくれ。それが無理なら証明させてくれ。

俺に。

辿り行く全部に意味があることを。

意味と結論。受け止めようとしているのに、咎められないせいで視界が余計に悪くなる。

俺はどういうスタンスで動けばいいんだ。たかだか『外の空気を吸いたい』なんて以外に、どんな目的で前に進めばいい？欲しいのは惨劇一つ分の理由。

「瞬」

呼ばれた名前に反応して視線を合わせても、千代は先を繋がなかつた。

名前を呼ぶことそのものに意味があつたのだろう。それとも説明が必要ないなんてお前は思つてゐるのか、千代？

遠くを見つめるようにこちらを捉えた千代の目は、何か訴えているようだった。

俺はきっとその意味を読み取らなければいけないのだろう。それは多分、価値のあることだ。そんな感情を覚えながらも結局、目を逸らした。

一人になりたい。

孤独に焦がれるなんて、俺らしくていい。

孤独を強いられて生きて来て、解かれそうになつて、またそれを求める。

楽なんだ。一人きりで、未来とか忘れたフリをして、なんとかやり過ごしていく日々が。

空虚な代わりに、他人の痛みに触れずにいられる。

俺が逸らした視線の先で、千代がすっと目を伏せた。なぜかそのまま、千代と言う人間が消えてしまいそうな錯覚に捕われる。

何も言わない市谷も、隣にいるのにいな気がした。

俺が欲しかったのは、ただ白い満月が黒い空に浮いているだけの世界だ。

人の死をその為の犠牲と呼ぶには分が悪すぎる。

予感がなかつた訳じゃない。だが俺の予感で見るかもしれないかった血は、あくまで俺たちのものだった。俺の頭の中のテキストは所詮机上の空論で、他者の感情は先の読めない波紋のように混じり合つて、存在していたはずの境界線を暈してしまつ。

最低な舞台に大量の人間を付き合わせてる。そんなこと、思いたくないけど。

「美樹のことは……美樹の問題だから、……瞬、千代……お前たちは生きていけよ」

市谷が聞き取れないくらいに小さく呟く。

完結するなよ。美樹だって一人きりで生きていたんじゃない。

持て余すほど想いがある中で、どうして形になるのがその言葉なんだ。

そうじゃなければ、きっと諦めがつく筈なのに。

「うん」

千代が短く答えた。イエスと言いながら奥歯を噛み締めたその横顔を、哀しいくらいに遠く感じる。

下らないことに大量の人間を付き合わせてると思うのに、目に映る光景を下らないとは思えない。

やつじつとなんだ。

この世界から消えて欲しくない何かを、この二人が持つてる。

一人を逃がそう。

それと引き換えになら俺は、他の何を失つても平氣だから。

多分俺に取つて、『自由』なんて言葉よりも欲しかったもの。千代や市谷がいることで、俺はこの場所が悲惨さや滑稽さで塗り固められていないと想い知る。

明日もこの世界に温かなものが存在すると疑わずに、田を開じる」とが出来る。

満月なんてどうだつていい。

「瞬

返事をしない俺を市谷が呼ぶ。顔を上げれば斜め前に千代の不安そうな表情。

「ああ。心配要らねえよ」

大丈夫。まだいける。

無機質な壁に塗れたこの空間で、いつか、脳の中まで無機質になつていいくのだろう。暗闇を脱して鮮血を見て、俺たちを先導する市谷の後姿。その白衣の白さが、あらゆるもの寄せ付けずに、独りこの男を連れ去つていく気がする。

「美樹は、駄目だったんだ。どのみち」

彼から漏れ出した言葉の意味が理解出来ずに、反応が遅れる。

「……駄目って、……」

「あいつは、この施設と外の世界を行き来してた。ここにいたる誰よりも頻繁に。外の『今』を知り続ける必要があると言つてた。……俺もそれがあいつらしさだと思ってた」

吐き捨てるような、噛み殺すような、どひらもが共存したような口調だった。

「それで最初のうちは問題なかつた。傍田には上手く割り切つてるように見えてたしな」

この場所と、もう一つの広がる世界を。

「だが、ここと都会は違ひすぎた」

そのひとにまあまつとも。切り裂かれててしまうほど。

「瞬。隔離に墮ちていくお前がいる一方で、街に並ぶ流行を追う他の者の波も、あいつには同じ現実だった」

どひらを正しことも間違いとも言えないまま、日々は過ぎてゆく。

「そんな中で研究は惨敗、お前たちの体内にウイルスは見つかるのに感染経路は挙がらない。瞬も千代も発症の気配もない。これは実際、俺たちにとって良い報せとはい難かった。感染力の無いウイ

ルスは売れない。売買を念頭に置く上で、お前たちが感染源にならないのなら、何らかの方法で感染の道筋を人為的に造るしかなかつた

た

頭を打たれるような感覚に眩暈がする。

「抗ウイルス薬もないってのに、培養するつもりだったの」千代の冷静な声が市谷を窺う。

「……ああ。でもそれも思惑通りにはいかなかつた。これを話すのはあまり気が進まないが……研究資金も底をついてきて、さじを投げかけたときにお前たちを一人まとめて売つてくれつて依頼があつたらしい。俺や美樹が聞いたときにはもつそれは決定事項だつた」

俺たちの生死もウイルスも、市場経済の一端を担つてゐるにすぎない。

ただ、それだけのこと。

何もかも間違ひだつたつて、もう、分かり始めるから。

美樹の苦しげな言葉の断片が、耳の奥で繰り返される。

「話を聞いたとき美樹はそうですかと事務的に一言言つただけだつた。あいつだけが、初めから瞬や千代の人権だとか、メンタル的な問題を気にしてたのに……」

「……」
へえ。

意外だとなんだとか、感情は様々あるはずだが、形にならないのが実際だつた。

美樹という、今まで存在も知らなかつた人間が、いくらこちらの人権やメンタルを気にかけていたと言わても、実感が湧くもの

ではない。

ただざわつとした何かが、心のどこかを掠めていく。

もともと動かすつもりも無かつた思考が、ここ数日のデータによつてべつたりと塗り替えられていく。死んでいる代わりに穏やかだった回路が、揺さぶられて大きく脈打つ。

今からうじて分かるのは、あの女が死んだこと、それに俺が関わつてこるところだ。

それから、それによって瞬や市谷が傷ついているといつ、胸くそ悪い現実。

どく、と、自分の中に捉えどころの無い不規則な息吹を感じる。「美樹」のことは、とりあえず、保留だ。

現状に片が付くまで。

せめて、瞬と市谷を逃がせるだけ持てば。

「ミキさんさあ、」

千代がふいに声を発する。

「綺麗なひとだったね」

それは何の含みも無いただの感想のよつた響きだった。

「この先」とあることに、千代の言ひ「綺麗なひと」の死を、俺は思い出すのだろうか。

それとも思い出す未来が訪れる前に、俺もこの訳の分からない世界に別れを告げてこらのだろうか。

「せんせえ、俺たちが逃げたら、どうなる？」
市谷が不意打ちを食らつたみたいに俺を見る。

「どうつ、て……」

「そのままの意味だよ。俺たちは自由が欲しくて逃げる。俺たちの動機はあんたにもわかるだろ？」

俺の側の話は分かつてゐる。分からるのは、俺と反対の立場の事情だ。

「…ああ、」

俺の言いたいことを計りかねる様子で、市谷は曖昧に返事をした。
「俺が知りたいのは、俺と千代をどつかの誰かさんに引き渡す取り引きが成立しなかつたら、何が起きるのかってことだ」

それまで黙つて話に参加する素振りも見せなかつた千代が、顔を上げて俺を見た。

「瞬、それ……聞かない方が身の為つてこともあるんじゃない」

「それは聞いてみなきや判断できねーだろ」

「瞬……でも気付いてるんだろ、聞いたつて自分の首を絞めるだけだ」

「嫌ならお前は聞かなきやいい」

「違う、俺が聞きたいたくないとか、そんなことじやない
千代の周りに険悪な空気が流れる。ここまで露骨に嫌そうな顔をした千代を見るのは初めてだつた。

「なんだよ」

真っ直ぐに交差した千代の不快そうな視線に、一瞬躊躇つゝいつな搖れが混じる。

「千代、言いたいことがあるなら言えよ。ダラダラ付き合つてゐる暇はない」

「なあ……瞬、そんなこと聞いてどうするんだよ……今まで……」

言いかけてそれでもまだ迷つてゐるような千代の目は、たぶん何かを訴えてた。

でもそれが何かは分からない。

泣きそうだな。「イツ。

千代は泣いたりしないだろう。でも泣きそうだと思った。

「…千代、」

別に喧嘩したい訳でも傷付けたい訳でもない。

「なんでそんな顔してんだよ」

泣いたりしない。「イツは、こんなところで。

でも、本当に今すぐ何処かへ逃がしてやりたいへんに辛そうだった。

一瞬俺から目を逸らして、千代がやっと口を開く。

「…、知つてどうするつもりだよ、瞬。今まで全部裏切られてきただろ、俺たちは。

今更良いニュースが聞けるなんて、…瞬だつて、思つてないだろ…

「ああ、思つてない」

「だったらもう、自分で自分を傷付けるような真似するなよ…」

なんで分からんのだよ、千代の表情が意味することは、きっとやんなところだつたのだろう。

「全部知らなくてもいいんだよ、瞬。全部の結果を背負つなんて誰にも出来ない。… そうでしょ？」

もどかしさとか、不安とか、優しさみたいなものが、千代の瞳の中

で一緒にくなっていた。

「だからもう、知ろうとしなくていいんだよ…」

たぶん千代は、自分のことを後回しだして俺のためにこんな弱々しい言葉を紡いでいる。

そして端から冷静に見れる分だけ、今、コイツは俺より俺のことを理解している。

「知りたいんだよ」

俺がそう答えると知つていたような顔をして、千代は遠くを見つめるように俺を見ていた。

揺れるのに逸れない目だった。

「分かっている」と許すような、「分かっていた」と安堵したような、静かな諦めと温かさを合わせ持つた目だった。それがどんな意味を持っていたのか俺にはわからない。でも一つ確かなのは、それを見て酷く哀しいと感じたことだ。

ああ、何かが、確実にすれ違った。

それはほとんど確信に近かった。

取り返しのつかない何かが起きた。

取り返しのつかないことなんて既に掃いて捨てるほどあったのに、どうこう風の吹き回しかその瞬間はやたらと重たいリアリティを伴つていた。

「じょうがないなあ」

千代がぼやいた。

「…馬鹿だなあ」

俺が馬鹿だと聞いたかったのか、自分のことなのか、それとももつと大きな外の世界に向けて呴いたのか、どれも当てはまりそうで、どれも違つようだつた。

「取引が成立しなかつたら、どうなるだろ? な。とりあえずここにいる人間は皆殺しかな」

次の部屋へ続く扉へ向かいながら、市谷がぼそりと呟いた。千代は何も言わない。

「…あんたら一体どんな奴と取引する気だつたんだよ」

市谷の後に続いて、俺は扉を見る。次の扉はガラス張りじゃない。窓も無い。向こう側に誰がいるかは分からぬ。

「分からぬ」

「は?」

「分からぬ。分かるのは相手が褒められない奴つてことだけだ」市谷はそう言いながら白衣のポケットを探つて一枚のカードを取り出し、扉の横に設置された掌ほどの大きさの機械にかざした。力チリと音がする。扉の鍵が外れたらしい。

「おい冗談のつもりか? 思想も信仰も分からぬ悪魔に、大量虐殺用のウイルスを差し出すつて? イカレテル」

市谷はこちらを見ない。わざと俺と目を合わさないようにして、ドアノブに手をかける。

「ああ。いかれてるよ」

市谷の表情は硬い。

千代は黙つたまま。

「まじかよ」

「ああ」

視線を逸らしたまま、市谷が扉を開ける。

「 - 」

開いた扉の前に立つたまま、小さく息を呑む気配。嫌な臭いがする。

「せんせえ? 何つったてん…」

「瞬」

後ろから覗き込もうとした俺の腕を千代が引いた。
俺は千代の方へは振り向かず扉の向こうを見る。

赤。

赤。

赤。

三人。

赤い部屋だ。さっきのパネル張りの悪趣味な部屋に比べて随分狭い。引き出しも何もない、足と板だけの簡素な四角いテーブルが二つ。そして床に、白衣姿の男が三人転がっている。転がっているのだ。白衣だが、白衣と呼べないほど赤い衣装を纏つて。そう。この赤は血の色。

一人は痩せ形。一人は眼鏡。一人は、若い。たぶん、二十歳そこそこだ。何の因果でこいつはこんなところに来てしまったんだろう。三人とも人形のように動かない。

それが何かなんて聞かなくてわかる。
今、同じものを見たばかりだから。

撃ち抜かれた、これは死体だ。

「美樹だ…」

市谷がうわ言のように囁く。この三人を、美樹が殺した。

俺は美樹の、おそらく「じめんなさい」と形作ったのであらう、あの唇を思い出す。

「お前たちを逃がすかどうかで口論になつたんだろう。もともとよく対立していたメンバーだ」

眼鏡の男は銃を握っていた。この施設では銃の携帯が公然と許可されていたようだから、俺たちの逃亡に関わらずいつでも撃ち合える状況だったのだろう。

「だからって……」

「だからだよ。美樹にもこの三人にも一刻が命より惜しかつた。美樹は迷うことさえ惜しんだみたいだな……」

確かにこの惨状が美樹の手際なら、美樹の判断と行動力が三人より圧倒的に早かつたということだ。美樹は自ら発砲した一発以外、かすり傷の一つもなかつた。

「あいつ。シユミレー・ションでもしてたかな。昔、お前を自由に出来たらつて言つてたことがあつたよ。俺は碌に聞きもしなかつたけど、もしかしたらずつとチャンスを窺つていたのかもしれない」
美樹は、感染者である俺を社会的に黙殺しようとするこの施設や、ここにいる職員を否定して、飼殺されようとしている俺に自由を与えていたと願つた。市谷が淡々と零した言葉が彼女の姿を縁取る。
感染しながら生きている俺を隔離して自由を奪うことに、罪悪感があつたのかもしれない。

不条理に対する嫌悪や虚無感。こんな場所で働くには、たぶん誠実さなんて自らを苦しめるだけのものなのに。

だけど美樹はそれを持っていて、今さつき、三人を撃ち殺し、自殺した。

「耐えられなかつたんだろうな……。美樹はお前を逃がしたかつたんだよ」

放された言葉が俺の心臓に突き刺さる。

「でも勘違いするなよ。それは美樹の意志で、お前のせいではない

「なんで…」「

自分の口から零れ落ちた声が、まるで別の次元で放たれたように遠く聞こえる。

「おかしい、だろ…こんなの…逃がしたいなんて、言つたって…」
俺が生きる為に、人が死ななきやいけないのか？俺のせいじやないなら、一体どうしてこんなことになつた。

もしも美樹が市谷の言うとおり俺を逃がすチャンスを狙つていたなら、そのきっかけを作つたのは、やはり俺自身だ。美樹は間違いなく、俺が逃げる意志を見せたから、行動したのだ。

「瞬、千代、行くぞ」

市谷が低く言つ。

「せんせえ…」

「これでおまえたちが逃げなかつたら、全部無駄になる」

「それは、わかってる…」

わかつてゐる、けど。

「瞬、行こう」

千代に静かに促されて、俺は血だまりに足を踏み入れる。ぴしゃんと靴の裏で踏んだ赤い液体が跳ねて、広がつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3841c/>

Emerging Disease

2011年1月26日19時10分発行